

魔法少女まどか☆マギカ×PS02 【仮面】

犬っぽい何か

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通り魔法少女まどか☆マギカのストーリーにPSO2の【仮面】を突っ込んだお話です

内容は魔法少女まどか☆マギカのストーリーに沿いながら【仮面】を投入して進行していきます。

【仮面】はPSO2本編のEP2 第六章の最後にて、クラリツサのエネルギーの放流から逃れるために時間遡行を行った直後からのスタートとなります。

初投稿のため文などガバガバですがあらかじめご了承ください。

あと独自設定やPSO2のEP1〜3までのネタバレがございませぬ。

目次

第十一話	87
第十話	77
第九話	67
第八話	55
第七話	44
第六話	36
第五話	25
第四話	16
第三話	12
第二話	4
第一話	1

第一話

「……………はいったい」

目を覚ますとその男…ダークファルス【仮面】はそこにいた。

暗いビルのような建物と思われる廃墟の中に、いつのまにか【仮面】は立っていた。

白錫クラリツサによる強大なエネルギーの本流から逃れるために時間遡行を行い過去にとんだはずだったのだが……

「まさか、時間遡行に失敗したのか……？」

ビルの廃墟の窓から外の様子をうかがい、そこから広がったのは夕暮れに照らされた全く見覚えのない市街地と思われる街並みの景色だった。

アークスシップの内部にある市街地と所々にているが、アークスシップの市街地とは明らかに違う所がいくつもある。

街中の看板や店などに書かれてる文字、街を行き交う人々の恰好、人々の口から発せられる言葉。

そのどれもがオラクルの文明によるものではなく、オラクルとは全く違う文明によって構成されていた。

「全く見覚えのない街に文字、それに人々の恰好…少なくとも私の知っている惑星ではないようだな」

クラリツサのエネルギーが暴走する中、巻き込まれないよう半ば強引に時間遡行を行ったことが仇となったのか、どうやら時間遡行が正確に行えなかったらしい。

今まで何度も時間遡行を行ってはきたが、このような事が起きたことは今まで一度も無かった。

「時間遡行に失敗したとはいえ今まで何度も繰り返してきた中でこんな惑星一度も訪れたはずはないのだが、何にせよ失敗したのならもう一度時間遡行を……いや」

ただ失敗したのならもう一度時間遡行を行えばいいのだが、今【仮面】が立っている場所は【仮面】自身が全く身に覚えがない場所であり、今までの経験からもこのようなことは無い。

飛んだ過去の場所や日時の多少のズレならまだしも、このような見えがけない場所、なにより今自分がいる過去の情報が少なすぎる中で更に時間遡行を行うのはリスクが高すぎる。

「今は時間遡行を行うよりも、現状の把握に徹したほうがよさそうだな」

まずは今の自分の服装と身体の状態を確認する。

上半身は襟の立った漆黒のロングコートとスーツに似た近未来的な服装に、その首元からは薄く赤色に輝く半透明状のネクタイと、顔には顔全てを覆う黒いサイバースクのような仮面に、頭から先端にかけて紫色にほんのり輝く紺色のショートウルフに似た髪型。

下半身は上半身のコートとスーツに合わせたようなズボンとロングブーツを一つにした同じく近未来的な服装。

身体も特に傷があるというわけではなく、問題なく動かせるようだ。

「身体は特に問題ないみたいだな。力のほうも……む？」

力はどうかと手にも力を込めた瞬間、「仮面」は違和感を感じた。力が使えないというわけではない。ダークファルスの力は問題なく使えるだが、何故だか不思議なくらいにいつもより調子が良い。

普段は慣れているとはいえ、力の放出による身体への負担が多少あったのだが、今は負担を全く感じることなく力が使える。

そしてその違和感の正体はすぐに理解できた。

「この惑星には、もしかしてフォトンがないのか……？」

今まで色々な惑星を巡ってきたが、フォトンのない惑星などみたことがない。いや、オラクルの宇宙の奥にフォトンが存在しない惑星があると噂程度で聞いていたことは何度かあったがこの惑星がそうなのだろうか？

まあここがどこであれ、ダークファルスとしての力が使えるのなら問題はなし

「身体も力も取りあえずは問題なし。ならば、次は今私がいるこの惑星が何なのかを把握するべきだな」

次の目標を決め、ビルの廃墟から立ち去ろうとした瞬間……

「やあ、無事にこちらについたみたいだね」

それは現れた。

第二話

「やあ、無事にこちらについたみたいだね」

【仮面】が後ろを振りむくと、そこにいたのは猫とフェレットを混ぜたような可愛らしい姿に、赤い瞳をした小さい生物がちよこんと座っていた。

こちらをじつと見つめて尻尾を左右に振って反応を待っているあたり、声の主は恐らくこの生物なのだろう。

「……何者だ貴様は」

突然背後に現れたそれに、【仮面】は警戒しながら問いかける。

「僕の名前はキュウベえ、魔法少女絡みで少々やかいなことがあつてね。今回はキミに協力してほしい事があつてこちらの世界に勝手ながらに呼ばせてもらったよ」

……—魔法少女？—こちらの世界？—呼んだ？

いったい何を言っているんだこいつは…。

魔法少女などという聞きなれないワードにこの世界に呼んだ、挙句の果てには協力してほしいなどと突然現れ自分に告げた「キュウベえ」とやらの、【仮面】は少々困惑していた。

「まあ突然こんなこと言われても状況が掴めないよね、キミには一から説明させてもらおうよ」

そうしてキュウベえは【仮面】に自分がどのような存在で、なぜ【仮面】をこちらの世界へ呼んだのか理由を説明しだす。

—自分は魔法少女になる素質を持った少女を探して旅をしていること。

—魔法少女として契約し、願いを一つなんでも叶える代わりに「魔女」という人に害をなす存在と戦ってもらおうということ。

—魔女との闘いで失った魔力は、魔女を倒したときに手に入る「グリーフシード」でしか回復ができないということ。

そして今この見滝原市には契約した魔法少女が既に二人おり、そのうちの一人である「暁美ほむら」という魔法少女がことあるごとにと

ある少女……「鹿目まどか」との接触を邪魔してきていて、暁美ほむらに対処するため今回オラクルの世界から【仮面】の時間逆行に接触しこちらの世界に呼んだということ。

「どうかな、これで今のキミの状況は大体理解してくれたかい？」

おおまかな説明を終えたキュウベえはこちらが理解できたのか確認を取るために首を傾げて問いかけてくる。

「ここは私がいた世界ではなく、貴様と魔法少女がどのような存在で、何故私をこちらに呼んだのかは理解した……だが」

「だが、なんだい？」

「なぜ私なんだ、ただ接触の妨害を防ぎたいのであれば、他の魔法少女に協力を仰げば済む話だろう。今の貴様の説明を聞くあたりでは、私でなくともその役目を担えるはずだ、なぜわざわざ他の世界に干渉してまで私を呼んだのかが理解できんな」

【仮面】の言う通り、確かにただ暁美ほむらという魔法少女の妨害を防ぐだけなのであれば【仮面】でなくとも、他の魔法少女に依頼すればそれで済む話だ。

それがわざわざ【仮面】を選ぶ理由にはならない。

「キミの言うことは最もだね、確かに妨害を防ぐという意味ではキミでなくとも事足りるだろう、でもこの暁美ほむらという魔法少女だけはかなり特殊だね」

「特殊……？」

「うん、彼女はどうも僕の行動を毎回先読みしているらしくてね。彼女がどう動くかわからない上、僕の動きをある程度把握されている以上は下手に動けないし、他の魔法少女に協力を頼もうにも彼女たちにこれといって僕に協力するメリットがないからね。正直なところ、お手上げ状態なんだ」

行動が先読みされているのでは迂闊に動くことはできない。かといって他の魔法少女に協力してもらうにもただ暁美ほむらとの戦闘に無駄な魔力を消費するだけで、グリーンシールドが手に入らないんじゃないや協力する意味などないのだ。

「メリットの話をするならなおさら貴様に協力する意味など私には無

いな、貴様がお手上げだろうがなんだろうが私に得られるものが何もない以上、貴様に手を貸す筋合いなどどこにもないだろう。

それに魔法少女と魔女の争いなど私には関係ない、魔女との闘いで魔法少女が何人死のうが、鹿目まどかと契約できないことでもいくら貴様が困ろうが、この世界の住人ではない私にとってはどうでもいいことだ」

「メリットならあるじゃないか」

「……何？」

今までの話の中のどこに【仮面】にとってのメリットがあるというのか。今の【仮面】の話を聞いて尚「メリットならある」と即答されたことに対し少々腹が立ったのか、【仮面】はキュウベえを睨む。

しかしそのメリットというのは【仮面】にとって最も単純かつ必要なことだった。

「キミは自分で元のいた世界に帰れるのかい？」

「……っ!？」

そう、【仮面】には現状自分の力だけで元の世界に帰る力も手段もない。

こいつは今の【仮面】にとって最も必要で重要なことを駆け引きに出してきたのだ。

「笑えん冗談だな。勝手に貴様が私を呼んだのに、貴様に協力する唯一のメリットがもとの世界へ帰ることだと？」

「その通りだよ。今のキミは元の世界へ帰るための手段も情報もないんだろ？」

それなら僕の提示しているキミへのメリットというのは協力するに値するものだと思うけどな」

「ふざけるな！貴様が勝手にしたことなんだぞ、私を元の世界に帰せるのなら帰すのは当たり前の話だろう！」

流星に【仮面】もこの無茶苦茶なメリットとキュウベえの話に腹が立ったのか、声に怒りを含ませ反論する。

「別にどうしても嫌だと言うのなら強制はしないよ。ただこの機会を逃したら、キミはずっと元の世界へ帰れないかもしれないけどね」

「……」

確かに現状ではキュウベえに協力するのが元の世界へ帰るための唯一の近道であり、手段といえるだろう。

「……うち、いいだろう、今私自身で元の世界へ帰る手段がない以上当面は貴様に協力してやる」

「契約成立だね」

癪ではあるが帰せるというのなら無いかもしれない帰るための情報をさがして途方に暮れるよりも協力してしまったほうが確かに話は早い。

なんとも理不尽で納得のいかない話ではあるが、「仮面」は元の世界へ帰るためにも渋々了承した。

「……それで、私は何をすればいいんだ？」

「さつきも言ったけど鹿目まどかと僕が接触する際に暁美ほむらが仕掛けてくる妨害を防いでくれればそれで良いよ。鹿目まどかが僕と契約してくれればそれでキミの役目はお終い、キミは元の世界へ帰すと約束するよ」

「……ふん」

キュウベえ本人から「元の世界へ帰す」という言葉を聞き、「仮面」も取りあえずは納得しておくことにした。

「一応聞いておくが、その暁美ほむらという魔法少女は魔法少女としてどれくらい強いんだ？」

「かなりの手練れだよ。同じく見滝原で魔法少女として活動しているもう一人の魔法少女、ベテランのバマミでさえ手間取るくらいだからね。暁美ほむらが使用する魔法については……申し訳ないんだけど僕にもよくわからないんだ」

「どういうことだ？」

「暁美ほむらという人間と契約した覚えがそもそもないんだよね。魔力そのものを見る限りでは間違いなく僕と契約しているはずなんだけど、僕には全く身に覚えがない」

自分で契約していたにも関わらずそれを覚えてないなど、笑い話にも程がある。

しかしキュウベえがふざけているようにも見えないことからすると、本当に身に覚えがないのだろう。

「イレギュラー……か」

【仮面】はキュウベえからの説明を受けて暁美ほむらという魔法少女の異質を確認し、そう呟いた。

「そう、イレギュラーさ。だからこそ目には目を、暁美ほむらというイレギュラーにはキミというイレギュラーをぶつけて対抗する。

どうだい？理になっっているだろ？」

「言いたいことはわかるが、相手の情報が何もないままではな……」

確かにイレギュラーに対してイレギュラーをぶつけるのは理になっってはいるが、暁美ほむらという魔法少女の戦闘スタイルや戦い方の癖など、相手にする本人の情報が全くないというのは【仮面】にとっても少々やりずらくはなる。

「ここまでよ、インキュベーター」

突然その場に少女の声が響く。

「ああ、丁度来たみたいだね」

「……？」

部屋に凜とした声が響き、その少女は突然そこに現れた。

長い美しい黒髪に学校の女子制服のような服で、鋭角的なデザインをした衣装を身に纏ったそう年端も行かない少女は、左腕に装備された砂時計を模した小さな盾のような物から拳銃を取り出し、ゆっくりとこちらに近づいてくる。

「おまえをまどかと契約させるわけには絶対にいかない。今、この場で全てを終わらせる」

「キミもいい加減しつこいね、暁美ほむら」

「……この少女が」

暁美ほむら……キュウベえがそう呼んだということはこの少女が暁美ほむらで間違いないのだろう。思っていたよりも幼い外見に【仮面】は少し驚いたが、この少女こそが自分の敵であるということを確認し、黒い大剣を右手に出現させてほむらの前に立ちはだかる。

「……いったい何のつもりかしら。私の邪魔をするのならあなたが誰

であろうと容赦しないわよ」

「……………」

「曉美ほむらの問いに対して【仮面】は沈黙したまま何も答えず、大剣を構え続ける。」

「そういう訳だ、曉美ほむら。キミが僕の邪魔をするならこちらもちらで対抗するためのイレギュラーを用意させてもらった。キミの相手は目の前にいる彼がしてくれるよ。それにキミがここにいるということとは、もうじき鹿目まどかもここへ来るんだろう？」

「魔女の結界の反応も近くにあるみたいだし、僕は鹿目まどかの元へ行くとするよ」

「そう言ってキュウベえはその場を去ろうとする。」

「っ！待ちなさい！」

「ほむらは立ち去ろうとするキュウベえに向かって拳銃から弾丸を放つ……………」

「ツな!？」

「その弾丸は全て【仮面】の大剣によって弾かれた。」

「それじゃあ後は任せたまよ、【仮面】」

「つく！」

「そしてキュウベえは廃墟の部屋を後にし、部屋には【仮面】と曉美ほむらの二人が残った。お互いに武器を構え睨み合ったまま暫く沈黙がつづいたが、曉美ほむらがその沈黙を破った。」

「…なぜあいつに協力しているの？あなたはいったい何者なの？」

「それを貴様に応える義務など私にはない」

「ほむらからの問いを【仮面】は一蹴して自身の仮面のうちから大剣を構えて睨み続ける。ほむらも相手の表情がわからない以上迂闊に動くことができない。」

「（これじゃ埒が明かない。あまり使いたくはなかったけど、ここはアレを使うしかない！）」

「ほむらは自身の左腕に装備している盾に手をかけその魔法を発動した。」

——時間停止魔法——

その名の通り、自分以外の周囲の時間を一時的に止める暁美ほむらの魔法少女としての能力である。その魔法の干渉に例外は無く、目の前にいる【仮面】も止まっている。

(よし、今のうちにキュウベえを追いかけないと……！)

【仮面】も止まっていることを確認したほむらは背を向けて部屋の出口に向かおうとするが、その瞬間、聞こえるはずのない人物の声が聞こえた。

「どこへ行くつもりだ」

「…っ!?なんであなたが!」

部屋の出口に立っていたのは、今まさにほむらが自身の魔法で止めたはずの【仮面】の姿だった。

今まであり得なかったことに対しほむらの中に緊張が走る。

「どうして動けるの!?!この魔法が発動している間は、私に触れていない限り動けないはず……」

今もほむらの時間停止の効果はつづいている、その証拠に自分と【仮面】以外の時間は止まったままだ。

ほむらは自身の時間停止魔法が効いていないことに驚きを隠せなかった。

「先ほど貴様を初めてみた時からなんとなく知り合いの力に似た何かを感じると思ったが……その反応の見る限り、貴様の魔法とやらの能力は「時間停止」で間違いないようだな」

【仮面】があっさり自分の魔法を見破ったことにほむらは眼を丸くして動揺する。

「あなた本当に何者なの。明らかに魔法少女ではないし。……人間?」

「応える義務はないといったはずだ。コレが貴様にとっての切り札で、もう手持ちのカードが無いのならこの場は退いたほうがいいと思うが?」

（今まともに戦って勝てる相手じゃない。今はこいつの言う通り、この場は退いて態勢を立て直したほうがいいわね……）

そう思ったほむらは左腕の盾からスモークグレネードを取り出し放り投げた。

部屋には煙が立ち込め、「仮面」は大剣を大きくふり煙を吹き飛ばすが、その時にはすでにほむらの姿はなかった。

「……退いたか」

【仮面】は右手の黒い大剣を消し、辺りを見回す。

（……まあ、これでまどかとキュウベえが接触する程度の時間は稼げたか）

十分とは言えないが、キュウベえがここを去ってからそれなりに時間を稼ぐことはできた。

正直【仮面】にとつても初見の相手とまともに戦うのはあまり好ましくはない為、今回は暁美ほむらが退いてくれたことに内心ホツとしていたが、これからも暁美ほむらと対峙する事は何度もあるだろうし、本格的な彼女への対応についてはこれからの課題となるだろう。

魔法少女についてもそうだが、魔女やこの世界の事も知らない事はまだ沢山ある。やはり今後の事も含め、色々とキュウベえと詳しく話をする必要があると感じた【仮面】は、キュウベえと合流するべく廃墟の部屋を後にした。

第三話

【仮面】は暁美ほむらの撃退に成功し廃墟を立ち去った後、見滝原市の噴水のある広場のベンチに腰掛け身体を休めていた。

廃墟を出た頃には日もすっかり暮れ、広場は夜の闇に包まれている。

人気も無く、街灯が数本うつすらと照らす広場で身体を休めていると、【仮面】の背後の暗がりからそれは声をかける。

「やあ、ッ苦労様。そっちはどうやら問題なく暁美ほむらの撃退に成功したみたいだね」

現れたのはキュウベえだった。

様子を見る限りどうやらキュウベえの方も上手く鹿目まどかと接触できたらしい。

「その様子じゃ貴様も上手くことが進んだようだな」

「うん、キミが暁美ほむらの相手をしてくれたおかげで鹿目まどかとの接触は成功した。途中鹿目まどかとその親友、美樹さやかと一緒に魔法の結界に囚われてどうなるかと思ったけど、ママが来てくれてね。何はともあれキミには感謝しているよ。接触のおかげで鹿目まどかだけでなく、同じく魔法少女の素質を持った美樹さやかも魔法少女と魔法という存在を認識し、二人とも興味を持つてくれた」

「そうか……」

【仮面】はほむらの撃退に成功し、キュウベえは鹿目まどかと、同じく素質を持った美樹さやかと接触することができた。

お互いに目標達成のための一步を踏み出すことが出来たのだから、最初の結果としてはまずまずだろうか。

「今後キミには鹿目まどか、美樹さやか、巴マミとも関わってもらおうことになるだろうからそのことも考えて後日三人とは一度顔を会わせてほしいんだけど、良いかな?」

「断る」

【仮面】はキュウベえからの提案を即答で断った。

「おや、どうしてだい?今後円滑にことを進めていくためにも彼女た

ちにはキミと直接会ってもらってお互いの存在を認識しておいた方が良いと思うんだけど」

確かに今後もキュウベえに協力し、暁美ほむらからの妨害を阻止していくのなら鹿目まどか、美樹さやか、巴マミの三人と接触することもあるかもしれない。

ならば事前にお互いの存在を確認しておいたほうがトラブルは少なくてできるだろう。

「貴様が私を元の世界に帰す条件として私に提示した協力する内容はあくまで「暁美ほむらの妨害」だけだ。今後それを行っていく上で鹿目まどか、美樹さやか、巴マミと何かしら関係を作ってしまうえば、彼女たちの面倒ごとにも巻き込まれるかもしれない。

面倒ごとを増やすくらいなら、彼女たちと関わらないように立ち回りながら貴様に協力したほうが私にとっては無駄なリスクを背負う必要もないからな」

【仮面】の目的は元の世界へ帰ること。それを達成するには「暁美ほむらの妨害」さえ引き受けていけば後はキュウベえが全て上手くやってくれるはずだ。

現状を見る限りではキュウベえと敵対しているのは今のところ暁美ほむらだけで、鹿目まどか、美樹さやか、巴マミの三人がキュウベえと敵対している様子はない。

「なるほどね。キミの考えはよくわかった。それなら僕も無理強いはしない。ただ、鹿目まどかがピンチになった時だけでも良いから彼女を守ってはくれないかい？」

「なぜ私が鹿目まどかを守る必要がある？それこそ暁美ほむらに任せればいい話だろう。やつが狙っているのは貴様だけで、鹿目まどかに接触しようとする貴様に対してそれだけ執拗に邪魔をしてくるのなら、暁美ほむらは鹿目まどかに対して何らかのこだわりがあるはずだ」

【仮面】の言う通り。鹿目まどかに接触を試みるたびに毎回必ずと言っていいほど暁美ほむらが現れるのなら、ほむらが常にまどかかキュウベえのどちらかを監視している可能性は高い。

鹿目まどかがピンチに陥ったのなら、わざわざ【仮面】が守らずとも暁美ほむらが勝手に守ってくれるのではないだろうか。

「万が一のことを考えての話さ。鹿目まどかが魔女の結界に囚われた時に、マミも暁美ほむらも毎回必ずきてくれる保証はどこにもないからね。いわば保険のような物だよ。鹿目まどかは僕にとつて今最も重要な契約候補であり、無くすにはとても惜しい存在だからね。それにキミが元の世界へ帰るために僕が頼んだ内容は「暁美ほむらの妨害」だけど、その期限は僕が鹿目まどかとの契約を完了するまでのはずだ。それならキミは必然的に僕が鹿目まどかと契約するまで彼女が死なないように守らないとキミも困るんじゃないかな？」

「……………」

(つち……いつ、こういう所は無駄に頭が回るのか)

【仮面】は心の中でキュウベエの余計な目敏さに多少鬱陶しさを覚えながらも、話を聞く限り確かに言っていること自体は筋が通っているし、鹿目まどかに死なれてしまつては【仮面】が元の世界へ帰るための唯一の切符を失うのも事実だと渋々納得する。

「良いだろう、鹿目まどかの件に関しては検討しておく」

「それは良かったよー!」

【仮面】からの了承らしい返答も得られたことで、キュウベエは満足そうに返事をする。

「それじゃあ僕は他にもやることがあるからそろそろ失礼させてもらうけど、キミはこれからどうするつもりなんだい?」

「私は私の方で元の世界へ帰るための情報収集をする。話には聞いたが、魔女がどのようなものか直接見たわけではないし、貴様が私を裏切らない確証もないからな」

「どうやら僕はあまりキミには信用されてないみたいだね、残念だよ」
キュウベエはそういつてわざとらしく残念そうな素振りを【仮面】にみせる。

「当たり前だ、今日突然連れてこられて、ほぼ強制的に協力させられた相手に信頼など抱けるものか」

「それもそうだね」

キュウベえはそう言つてつまらなさそうにしながら夜に包まれた広場を後にしようとする。

「それじゃあね、【仮面】。また何かキミに用事が出来たら連絡するよ」
「…………ふん」

そうしてキュウベえは暗がり歩いていき広場を後にし、キュウベえがいなくなると、広場に一人残された【仮面】もベンチから腰を上げて歩き出す。

「…………こんな所で足止めをくらっている時間などないと言うのに。どうにか自力でオラクルへの帰還法を見つられば良いのだが」

キュウベえが言う通り。今の自分ではオラクルへ帰還する方法はないが、だからといっていつまでも大人しくヤツの思惑通り動いてやる訳にもいかないし、もしもの時のためにも自分で帰還できる手段はあつたほうが良いに越したことはない。

望みは極めて薄いだが、帰還のための情報は一応収集しておくべきだと思つた【仮面】は、これからの自身の行動の方針を固めると、広場を後にした。

第四話

「はあ……」

朝の通学路。

転校初日の見滝原中学へ向かう暁美ほむらは昨日のビルの廃墟でキュウベえと手を組んでいると思われる仮面の男と対峙した時のことを思い出し、頭を悩ませていた。

「まさかあんなイレギュラーが出てくる上、よりによってキュウベえと手を組まれているなんて最悪ね」

暁美ほむらは自身にとって最もかけがえない存在である鹿目まどかが魔女になり、世界を滅ぼしてしまう運命を変えるため「鹿目まどかとの出会いをやり直す」という願いの元に、手に入れた時間遡行の力で同じ世界を何度も繰り返してきた。

そんなループの中でも、イレギュラーそのものは何度か遭遇してきたが、「仮面」のように自分の時間停止に直接干渉することができる存在と敵対したのは今までのループの中で一度も無く、初めての経験だった。

しかもその異例中の異例である存在がキュウベえに手を貸しているとなると、今後起こる様々な問題に対応する時にほむら自身も動きずらくなる。

「私の時間停止が効かない以上、今まで戦ってきた相手と同じやり方は通じないだろうし、何か他の手を考えて早急に対処しないと……。今後巴マミや美樹さやかとの問題にぶつかったときにあの仮面の男に干渉されたりでもしたら面倒なことになるわ」

このままあの仮面の男を野放しにしておけば、ほむらにとっての状況が悪くなる一方なのは間違いないだろう。

しかも昨日のように鹿目まどかとキュウベえの接触を阻止しようとする度にキュウベえを守られては、まどかはいずれキュウベえと契約を交わしてしまう。

「まどかの命を狙っている……ということとは昨日の様子を見る限りなさそうだったし、キュウベえと同じ目的を持っているようにも思えな

かった。では一体何が目的でキュウベえに手を貸しているのかしら……」

考えれば考えるほどにあの仮面の男の行動の意図がわからなくなる。

「【仮面】……」

キュウベえは確かにあの仮面の男のことをそう呼んでいた。明らかに魔法少女ではない。だが人間にも思えない得体のしれないその異質な存在に、ほむらは顔に不安の表情を浮かばせる。

（今の私一人の力で仮面の男に勝つのは難しい。ではバمامミに声をかけて協力してもらおう？……いえ、駄目ね。私はそもそもバمامミから警戒されている。彼女からの信用を得られていない今、協力を申し出たところで相手にされないわ）

時間停止に干渉されては現状ほむら一人で【仮面】を撃破するのは実際かなり厳しいだろう。

昨日対峙した際、キュウベえに向けて放った拳銃の弾全てに反応して動くことができるほどの反射神経を持つほどだ。しかもほむらは時間停止以外の魔法を使うことができない。だからこそその穴を埋めるために自衛隊や暴力団から銃火器をかき集めて武器として今まで魔女と戦っていたのだから。

となるとやはり他の魔法少女と連携して勝率をあげて戦うのが手段として順当なのだろうが、生憎ほむらはキュウベえの命を狙っているということもあり、キュウベえと特に親しくしているバمامミからはかなり警戒され敵対視されている。

魔女討伐の際、暁美ほむらとバمامミと鉢合わせすることが何度かあったが、その度にお互いの価値観の違いなどで争いになるほど二人は仲が悪い。

協力を持ち掛けて共に戦うというのは、到底無理な話だろう。

（ああもう、どうしていつもこう規格外のイレギュラーが割り込んでくるのよ……。今回に限っては完全にキュウベえの味方に付いているから質が悪すぎる）

ただでさえこれから先避けて通ることができない問題が多いとい

うのに、さらにキュウベえに味方するイレギュラーが増えるなど冗談ではない。

「とにかくあの仮面の男をどうにかしないと、このままじゃ全てがキュウベえの思うつぼだわ……っあ」

そうこう考えている内にほむらは見滝原中学の校門前に到着していた。

もうすぐ朝のホームルームが始まり、またほむらは鹿目まどかとの出会いをやり直すことになる。

様々な問題はあるが、だからといって鹿目まどかを救うことを諦めるわけには絶対にかない。そのために暁美ほむらという魔法少女はここまで戦ってきたのだから。

(まどか…今度こそ私は、あなたを救ってみせる)

その思いを胸の中で硬く誓い、ほむらは学校へと足を進めた。

見滝原中学、二年生の教室

「おっはよー！まどか、仁美！」

「おはよう、さやかちゃん」

「おはようございます、さやかさん」

教室に入るなり、青いショートヘアの少女は教室の席に座っていたピンク色の髪を赤色のリボンでツインテールにまとめた少女と、そのとなりにいたグレーグリーン色をしたウェーブヘアの少女に元気よく朝の挨拶をする。

先に挨拶をした青いショートヘアの少女は美樹さやか、鹿目まどかと志筑仁美のクラスメイトであり、親友でもある。

元気で活発な性格はいつもまどかと仁美を明るくさせてくれる二人にとってのムードメーカー的存在だ。

一方美樹さやかは挨拶に返事をしたうちの一人である。ピンク色の髪をツインテールにまとめた少女は、鹿目まどか。

同じく美樹さやかと志筑仁美のクラスメイトで、親友だ。友達思いで心優しい性格とその柔らかな笑顔は、周囲を和ませてくれる。

そして最後にもう一人のグリーングリーンのウエーブヘアの少女。志筑仁美も鹿目まどかと美樹さやかの親友で、容姿端麗で典型的なお嬢様だ。

沢山の習い事を掛け持ちしているらしく、しっかり者なイメージが強い彼女だが少々天然な所があり、それもあつてか男子生徒からはかなり人気でラブレターをちよくちよく貰うんだとか。

「おーまどかどうしたのそのリボン、可愛いじゃーん！」

「そ、そうかな……派手すぎない？」

「ふふ、とても素敵ですわ」

「さてはまどか、イメチェンしたなく？好きな男子がいるなら、このさやかちゃんが相談に乗って上げようか！」

「ち、ちがうよ！これはママが……」

「ママからモテる秘訣を教わったな！？けしからん、こいつめく！」

「ちよ、ちよつとさやかちゃん、くすぐりたいよ！やめて！」

さやかがまどかをからかい、顔を赤くしてあたふたするまどかの可愛い反応をみて我慢できなくなったのか、さやかはまどかの身体をくすぐり始める。

「さやかさん。あまりまどかさんに意地悪してはいけませんよ？」

「わかってるってー。まどかの反応が可愛くってさく！ごめんごめん」

「もう、さやかちゃんったら……」

そんないつも通りのほのぼのとしたやり取りがしばらく続いたが、ここでさやかはまどかと仁美にこんな話をした。

「ねえ二人とも知ってる？実は今日、このクラスに転校生がくるんだってさー！」

「え、転校生？」

「珍しいですわね……」

転校生が今日このクラスに転入してくる。予想してなかったさやかからの話に驚いたまどかと仁美は目を丸くした。

「そうそう。なんでも超美人の女の子らしいよ？クラスでは前から転校生がくるって噂が流れてて、その話でもちきりだったし」

「そ、そうなんだ……。全然知らなかったよ」

「わたくしも初耳です。どんな方なのでしょうか……。少し楽しみですわね」

超美人の女子生徒ということで、各々転校生に対しどんな娘なんだろうと期待が膨らむ。そんなことを考えていると、突然まどかとさやかの脳内に声が響いた。

『曉美ほむら、やっぱりこの学校に転校してきたね』

「え、何今の声!?!」

「どうかしましたの？まどかさん」

「今、声が聞こえたんだけど……」

「声？わたくしは何も聞こえませんでしたけど……」

どうやら今の頭の中に響いた声は仁美には聞こえなかったらしい。

まどかはさやかの方に目をやり、さやかも動揺している所をみると、さやかには聞こえていたようだ。

『僕だよ、まどか、さやか』

「え?」

ふとまどかは自分の席の下の方に目をやると、そこには赤い瞳をこちらに向けて、ちよこんと座る可愛らしい白い生物、キュウベえがいた。

「きゅ、キュウベえ!?!」

「ちよ、なんであんなここにいるのよ!?!」

さやかもキュウベえの姿を発見し、まどかと共に驚きの声を上げる。

昨日の夕べ、まどかは自分を呼ぶ声がすると言ってビルの廃墟に向かった。

その時のさやかにはキュウベえの声は聞こえていなかったらしく、突然走り出したまどかについていき、ビルの廃墟にてキュウベえと出

会い、魔法の結界で魔法の手下である使い魔に襲われていた所をまどかたちと同じ見滝原中学に通う三年生の先輩である魔法少女、巴マミによって助けられ、巴マミとキュウベえから話を聞き、まどかとかは魔法少女と魔法の存在を知った。

「きゆうべえ？お二人とも何の話をされているのです？」

キュウベえの姿が仁美には見えていないのか、二人の話についていけずキョトンとしてしまっていた。

「え？ああいや何でもないよ仁美！ごめんごめん……」

「ごめんね仁美ちゃん、さやかちゃんの言う通り何でもないの！あはは……」

「そうなんですの？」

置いてけぼりが少々嫌だったのか、しよぼんとしていた仁美にまどかとかは急いでフオローを入れる。

「突然ごめんよ。志筑仁美と他の人たちには僕の姿も声も認識できないから、安心して」

(そ、そうなんだ……よかった)

他のクラスメイトたちには自分の姿と声は認識できないとキュウベえから聞き、まどかとかはホツと胸をなでおろす。

「今二人にはテレパシーを使って脳内に直接僕の声が届けているんだ。頭の中で喋る感じをイメージしてもらえると僕とつながりをもっている今の二人になら出来るはずだよ」

キュウベえからテレパシーのやり方を聞き、早速まどかとかは頭の中で喋る感覚で言葉をイメージして、キュウベえに話しかける。

『こ、こうかな？』

『うわ何これすー！喋ってないのにまどかの声が聞こえる！』

まどかとかはさやかのお互いの頭の中に、お互いの声が響きあう。

『呑み込みが早いね。まどか、さやか、流石だよ』

『これどうなってるの……？』

テレパシーに成功はしたが、普通ではあり得ないことにまどかは動揺し、さやかも同じく驚いた表情でキュウベえを見つめる。

何がどうなっているのかと動揺する二人を見てキュウベえは説明

を始めた。

『このテレパシーは僕と繋がりをもった人間同士で行える、いわゆる連絡手段のような物だよ』

『繋がり？』

さやかはキュウベエの言う繋がりというワードに疑問を浮かべる。

『簡単にいうと魔法少女の素質があったり、僕が直接人間に干渉した時にできる「縁」のような物かな。繋がりさえあれば、魔法の結界に囚われでもしない限りはある程度距離があってもテレパシーを通じて会話ができる』

『なるほどね。これすっごい便利じゃん！』

キュウベエからテレパシーの説明を聞き、納得といった感じにさやかは反応する。

『もちろんテレパシーは僕と契約した魔法少女でも使うことができるから、緊急時や連携を取りたい時に活用することもできるよ。』

まあ昨日マミから話を聞いたとは思うけど、魔法少女同志ではグリーンシードの奪い合いでお互いに縄張り意識が強いから、連携を目的として使われることはほとんどないだけだね』

『そうなんだ……』

グリーンシード……それは魔女を倒した際に魔女が残していく、魔法少女にとつていわば戦いの報酬のような代物だ。

戦闘で消費した魔力はこのグリーンシードを使用することでしか回復する手段がない上、無制限に一つを使いまわすことができないので魔法少女たちはそれぞれ街に自分たちの縄張りを張り、自分の縄張りに他の魔法少女が侵入した場合はグリーンシードの奪い合いに発展して戦いになってしまう事が頻繁に起きる。

バマミからグリーンシードと縄張りの話は聞いてはいたが、キュウベエからどこの街でも奪い合いの争いが起きていると聞き、まどかは表情を少し暗くする。

『やっぱり魔法少女同志で協力して戦うのは無理なのかな……。魔法から街の人たちを守るために戦ってるはずなのに、その魔法少女同志が争わなくちゃいけないなんてやっぱり変だよ……』

『皆が皆縄張りという考えを強く意識しているわけではないよ。中にはマミみたいに他の魔法少女と極力争いにならないように立ち回って、時には協力することもあるけど、やっぱり割合的には縄張り意識の強い魔法少女が多いからね』

『そつか……。マミさんから話は確かに聞いたけど、私たちが考えるよりずっと厳しい世界なんだね、魔法少女の世界って』

キュウベえからの説明を受け、まどかとかさやかは改めて魔法少女として生きていくことの厳しさを実感する。

「お二人とも一体どうしたんですの？さつきから互いに見つめあったりして……」

「っえ!？」

「っあ」

先ほどからずっと互いに見つめあいながら頷いたりしている二人をみて不思議に思った仁美はまどかとかさやかに声をかける。

まどかとかさやかがキュウベえとテレパシーで会話している様子は、何も知らない仁美からすればさぞ異様な光景に見えただろう。仁美に声をかけられたことにより、二人は今の自分たちの状況に気づきハツとする。

「もしやお二人とも、わたくしの知らないところでいつの間にか目と目だけで通じ合える程の関係にまでなっていたんですの!?!わたくし寂しいです!」

仁美はそういうとわざとらしく泣くような素振りをまどかとかさやかにしてみせる。

「ち、違うの仁美ちゃん!これはその……仁美ちゃんが考えているようなことじゃないから!」

「そうだよ仁美!別に仁美を置いてけぼりにしてるわけでもあたしとまどかが如何わしい関係になったとかじゃ決してないからあ!?!」

「よよよ……」

泣く演技をし続ける仁美に必死にフオローを入れるまどかとかさやか。そんなやり取りをしていると教室の扉が開かれまどかたちのクラスの担任である早乙女和子先生が入ってきた。

「はいみなさん、席についてください。今日はみなさんに今日からのクラスに新しく入る転校生を紹介します」

早乙女先生の言葉を聞き、クラスの全員が席に着いて静まり返る。
(どんな娘なんだろう……)

まどかは新しく入る転校生に期待を抱き、転校生が紹介されるのを待っている。

「それじゃ暁美さん、入って」

教室の扉がガラツと開くと、転校生の少女は教卓の近くまで歩き、まどかたちの方を向く。

「それじゃあ自己紹介、いってみよー!」

転校生の少女は自身の名を告げる。

「暁美ほむらです、よろしくお願いします」

(……………え?)

その少女の名前を聞き、まどかはなぜか心のどこかで確かな違和感を感じた。

第五話

「暁美ほむらです。よろしくお願いします」

転校生の少女は自身の名をそう告げた。

(うわー！噂には聞いてたけどすっげー美人……)

(……………)

さやかは噂以上の美人である暁美ほむらに目が釘付けになっていた。

長く綺麗にとかされた美しい黒のロングヘア。そして凛とした佇まいと紫色の瞳、見る者全ての目をひくその容姿の美しさに、さやかのみならずクラスメイト全員が目を離せなかった。

「えー暁美さんは心臓の病気でずっと入院してたの、まだ治ったばかりで身体も動くことに慣れてないから、何かあったら皆で暁美さんのことを支えてあげてね。暁美さん、クラスの皆に何か一言ある？」

早乙女先生がほむらは前まで心臓病にかかって入院していたことをクラスメイトたちに教え、クラスに何か一言ないか尋ねられると、ほむらはもう一度お辞儀をする。

「病気が治ったばかりでクラスの皆には迷惑をかけるかもしれませんが、改めてこれからよろしくお願いします」

ほむらがクラスに向けてそう言うと、クラスから歓迎の拍手が沸き上がった。

そんな拍手の音が響く中、ほむらはまどかとその隣にいるキュウベえに対して睨みつけるように目を少し細めた。

「っあ……うう……」

突然睨まれたまどかは困ったような表情を浮かべ縮こまってしまい、キュウベえの方はというと何一つ微動だにせず、黙ってほむらを見つめ続けた。

そして朝のホームルームも終わり休み時間に入るとほむらの周りにはクラスメイトの人だけができ、ほむらは質問攻めにされた。

「暁美さんって前はどこの学校だったの？」

「東京の、ミッション系の学校よ」

「前は部活とかやってた？運動系？文科系？」

「やってなかったわ」

「すごい綺麗な髪だよー！シャンプーは何使ってるの？」

そんなクラスメイトに質問攻めされるほむらの様子を、まどかやさやかと仁美は少し離れた所から見ている。

「すごく不思議な雰囲気をされた方ですね、 暁美さん」

仁美は質問攻めにされているほむらを見て、そう呟く。まどかはまどかで先ほどからじつとほむらのことを見てボーッとしている。

「どしたのまどか。そんなじつと転校生のこと見て」

さやかはほむらのことを見つめるまどかが気になり、そんなさやかの問いかけに対してまどかはハツとしてから答える。

「なんだか私、 暁美さんに前にどこかで会ったことがあるような気がする」

「知り合い？」

「ううん、 初対面のはずなんだけど、 なんでだろう？」

そういえば先ほど、キュウベえがほむらのことを「やっぱり」と言っていたことを思い出したまどかは、テレパシーでキュウベエに話しかける。

『ねえキュウベえ、 暁美さんって……あれ、 キュウベえ？』

ホームルームが終わるまでは確かにまどかの席の横に座っていたのだが、 いつの間にか姿を消していた。

『ねえさやかちゃん、 キュウベえのこと見てない？』

『あれ、 そういえばいないね。 どこいったんだろ』

まどかやさやかがキュウベえを探してあたりをキョロキョロとしていると仁美がまどかに話しかける。

「ま、 まどかさん」

「どうしたの仁美ちゃん……あ」

仁美に声をかけられまどかは仁美の方を見る、 仁美が指をさしているのもその方向に目をやると、 まどかの席の目の前までいつの間にかほむらがきていた。

「…鹿目まどかさん」

「は、はい！」

まどかは突然ほむらに名前を呼ばれたことに驚き身体をビクツとさせる。

「あなた保健係よね、具合が悪いから連れて行ってくれないかしら、保健室」

「……っえ!? えっと、あの…はい」

そうして二人は教室を出て、保健室へと向かうべく廊下を歩き始めるが、連れていかれる側のほむらがなぜか連れていく側のまどかより先に足を進めていた。

保健室へ向かう間、二人の間には沈黙が流れ、気まづくなったのかまどかはほむらに話しかける。

「あの、なんで私が保険係って知ってたの？」

「……」

「あうう…」

まどかはこの気まづい雰囲気をなんとかしようとはむらに話しかけるがほむらは黙って歩き続ける。

しかしほむらも流石に黙り続けるというのは気が引けたのか、暫く沈黙したあとまどかの問いかけに答えた。

「……早乙女先生から聞いたのよ」

「そ、そうなんだ。えっと、暁美さん？」

「ほむらでいいわ」

「は、はい。ほむらちゃん？」

「何かしら」

「その、かっこいい名前だね」

「……」

また会話がないまま二人は歩き続けたが、やがてほむらは急に立ち止まりまどかの方へと振り向く。

まどかは急に立ち止まりこちらに振り向いたことに少し驚いて、ほむらに少し遅れてまどかも立ち止まる。

「ほむらちゃん、どうしたの？」

「鹿目まどか、あなたに警告しておくわ」

「え？」

まどかは「警告する」とほむらに告げられ身構える。

そんな身構えてるまどかに対し、ほむらは眼を少し細めてまどかに言い聞かせるようにその言葉を言い放った。

「もしあなたが今いる家族や友人のことを大切に思っているのなら、今すぐにキュウベえと関わるのはやめなさい。あなたは、あなたのままでいればそれで良い。絶対に今の自分を変えようだなんて思わないで」

「ほむらちゃん、どうしてキュウベえのことを……！それに、キュウベえと関わるのをやめなさいって、どうして？」

ほむらがキュウベえの存在を認識していることにも驚いたが、なによりキュウベえとは関わるなど言われたことに対して納得ができず、まどかはほむらに質問する。

「あの存在はとても危険よ。契約して魔法少女になってしまえば、あなたはいずれ破滅することになる」

キュウベえと関わり続けて契約すれば、いずれ破滅する。キュウベえと関りがある者なら誰だって今のほむらの警告を聞けば動揺するだろう。

まどかはほむらに言い放たれた言葉の意味が理解できずに困惑する。

「ほむらちゃんは一体何者なの？もしかしてほむらちゃんも魔法少女なの？」

「私が魔法少女かどうかなんて、あなたには関係のないことよ。とにかく警告はしたわ。私が今あなたに言ったこと、絶対に忘れないで」

「あ……」

まどかは少し手を伸ばしほむらを引き留めようとするが、ほむらはまどかに警告をするだけすると、まどかを一人その場に置いて廊下の奥へと一人で行ってしまった。

下校時刻

あれからというものの、ほむらはまどかに対し学校内で睨みつけたりすることは度々あったが、それ以外は特にこれといって何事もなく今日の授業は無事全て終了した。

「たっはあーつつかれたー!」

「……」

帰りのホームルーム後、仁美は習い事があるということでもまどかとさやかと別れ、まどかとさやかは一緒に下校していた。

さやかは授業から解放されたことに解放感に身体を伸ばしながら、まどかはほむらから警告されたことに解放感に身体を伸ばしながら、で引つ掛かりなんともすすつきりしないといった表情を浮かべながらさやかの隣を歩く。

「まどかどしたの? さつきからずっと考え込んで」

「うん、ちよつとね」

「朝転校生を保健室に連れて行った後からずっとそんな感じじゃん。転校生となんかあったの?」

ほむらから警告されたことをさやかにも今伝えるべきか。しかしほむらの話を信じ切ることができないまどかは、さやかに話してもさやかも混乱してしまうのではないかと、中々きりだせずにいた。

ほむらが嘘を言っているようには思えなかったし、しかしキュウベえが自分たちを騙しているようにもとても思えない。そんなことを考えていると不意に後ろから声をかけられる。

「鹿目さん、美樹さん?」

「っあ」

「マミさーん!」

二人に声をかけたのは昨日廃ビルで魔女の使い魔に襲われていた所を助けてくれた同じ見滝原中学校に通う三年の先輩の魔法少女、巴マミだった。

マミの姿を確認したさやかはマミに駆け寄り、まどかもその後が続いた。

「二人とも奇遇ね。こんな所で…今帰り？」

「そうなんですよー！」

「こんにちわママさん」

ママに会えたのが嬉しかったのか、さやかは元気に挨拶をする。まどかも続けて挨拶をするが、やはりどこか表情が曇っている。

「鹿目さんどうしたの？なんだか元気がないけど、何かあった？」

そんなまどかの様子を見て心配になったのか、ママはまどかに声をかける。

「今日の朝転校生を保健室に送ってからずっとこんな感じなんですよー」

「転校生？」

「はい、暁美ほむらっていう名前の転校生なんですけど」

「っ!?…そう、暁美さんが」

さやかから暁美ほむらという名前を聞いたママは一瞬驚いた表情をし、暗い顔をする。

「ママさん？」

「二人は、暁美さんのことキュウベえから何も聞いてないのね？」

「え、どういうことですか？」

さやかの今の反応からして、ほむらとキュウベえの関係を何も知らないのだろうと思ったママは二人に提案する。

「立ちながらもなんだし、歩きながら話しましょう、二人ともついてきて」

「転校生がママさんと同じ魔法少女で、キュウベエの命を狙っているなんて……」

「やつぱりほむらちゃん、魔法少女だったんだ」

あれから二人は、ママから暁美ほむらという魔法少女のことについて色々話をされた。

暁美ほむらは以前から頻繁にキュウベエと自分の前に姿を現し、

キュウベエを見つけては執拗に追いかけて殺そうとしており、魔女の結界内で鉢合わせすることも何度かあったがその度にお互いの価値観の違いでぶつかることがあった。

暁美ほむらがそうする理由はマミ自身にもよくわからないが、少なくともキュウベエの命を狙っているのであれば迂闊に近づくのは危険であり、警戒すべき相手だという。

「やっぱりってことは、鹿目さんの元気がないのも暁美さんが関係してるのね?」

「えっと、はい……実は」

まどかは、ほむらに言われた警告の内容を全てマミに伝えた。

家族や友人を大切に思うならこれ以上キュウベエと関わるのは危険だということ。そしてキュウベエと契約すれば、いずれは破滅の運命をたどることになるといことも。

「暁美さんがそんなことを……」

「はい。でもほむらちゃんが嘘をついているようにも見えないし、キュウベエが私たちを騙しているなんて思えなくて。……私どうしたらいいのかわからなくて」

「でもなんで初対面のまどかに転校生がわざわざそんな警告なんてするわけ? 転校生にとって何の得もないと思うんだけど」

さやか疑問も最もだ。

今日ほむらと会ったばかりのまどかからすればなぜ初対面の自分にそんな警告をするのか全く意図がわからない。

自分の立場が友人ならば心配という意味で警告するのはわかるが、今まで関りが無かった人間にそんなことを言うなど、ほむらにとって何のメリットもないだろう。

「とにかく、暁美さんの話に確信が持てない以上、彼女に関わるのは危険だわ。今は様子を見て、二人はできるだけ彼女と距離を取るようにしてくれる?」

「わ、わかりました……!」

「ほむ……」

マミからの話にさやかとまどかは頷くが、まどかは少し納得がいつ

ていない様だった。

「まあでも学校の中にいる間は私もいるから暁美さんも下手に接触してくることはないと思うし、何かあったら私が二人を守るから安心して……ッ!?!」

「マミさんどうしたんですか?」

突然の話をするマミの顔が険しくなり、マミは周囲を見回しながらあたりを警戒していた。

そんなマミの様子が気になったまどかはマミに声をかける。

「ここからそう遠くない場所に魔女の結界の反応があるわ。多分、反応からして恐らく昨日鹿目さんと美樹さんを襲った使い魔の魔女ね」
「昨日のあいつらの」

「魔女……」

魔女は異次元に結界を作って閉じこもり人目をを避けながら活動しており、魔女に魅入られた一般人は魔女の口づけという呪いの刻印を刻まれ、自殺衝動が掻き立てられたり交通事故などに巻き込まれるように操られ殺される。

結界に迷い込んだ場合どうなるかは魔女によって異なるが、少なくとも一般人が生きて帰れることは奇跡でも起きない限りは不可能だろう。

まどかとさやかは昨日自分たちが襲われた時のことを思い出し、あの時の恐怖が身体に戻ってくる。

「昨日の鹿目さんと美樹さんみたいにまた誰かが結界に迷い込んでしまうかもしれないし、放つては置けないわね。鹿目さん、美樹さん、悪いのだけど私はこれから魔女の結界に向かうわ、話の続きはまた今度にしましょう」

「……あの、マミさん!」

魔女の結界へ向かおうとするマミをまどかは引き留める。

「どうしたの? 鹿目さん」

「あの、私も一緒に連れて行ってくれませんか?」

「ちよ、何言ってるのまどか!?! あたしたちマミさんと違って魔法少女になった訳じゃないんだから戦えないんだよ? マミさんについて

いったって邪魔になるだけだっ—！」

まどかからのとんでもないマミへの申し出に驚くさやか。

さやかの言う通り、まどかもさやかも魔法少女ではない。マミについていった所でお荷物になるのは確定であろう。

そんなまどかの申し出に対しマミはまどかを真剣な表情で見つめ、まどかに問う。

「どうして私と一緒にいこうと思ったのか、理由を聞かせてくれる？」

マミからの質問にまどかも真剣な表情で答えた。

「私、確かにほむらちゃんはどうして警告してくれたのか、その意味は今も全く理解はできてないです……。でも私はほむらちゃんのこと、出来れば信じてあげたい。だから自分の目で見て確かめたいんです。魔法少女のことも、魔女のことも……。マミさんの足を引っ張っちゃうのは私もわかってます。でも、お願いします！」

そう言っ—まどかはマミに頭を下げる。

その様子を見ていたさやかもまどかの隣にたっ—一緒に頭を下げる。

「あたしからもお願いします、マミさん！」

確かにあたしたち、マミさんの助けにはなれませんが、キュウベえに素質を見出されて契約する権利があるなら、あたしも自分の目で魔法少女と魔女の戦いを見て、決めたいです……！」

「……………」

二人の話を聞いたマミは暫く考えこんでいたが、やがて二人の手を取っ—笑顔で二人の申し出に返答した。

「わかったわ。二人がそこまで言うなら一緒にいきましよう」

「マミさん……………」

「ありがとうございます！」

「でも約束して。絶対に無茶はしないこと、それから結界に入ったら何が起こるかわからないから、私のそばを離れないようにすること。約束できるっ—！」

「はい—！」

「わかりました！」

そうしてマミとまどかとさやかは、魔法の反応を辿りながら移動を開始し、しばらくして魔法の反応が最も強くなった所で、マミは足を止めた。

「ここって……」

「昨日、あたしたちが使い魔に襲われた、廃ビル？」

その場所は、昨日まどかとさやかが使い魔の結界に捉えられていた廃ビルだった。

「間違いない。反応からしてここに魔法が結界を作っているのは確定みたいね。二人とも、覚悟の準備は良い？絶対私に私がさつきいったことと忘れないで、傍を離れちゃ駄目よ」

「はい！」

「はい！」

二人の了承を確認して、マミは変身して魔法少女の戦闘衣に身を包み、廃ビルに足を踏み入れる。

その瞬間、景色は一変し壁は肉壁に、それに付き刺さる鉄のような刃物、そして薔薇のような花と茨で構成された空間が出来上がった。マミがあたりを見回し周囲を警戒するが、使い魔は見当たらないようだ。

「うわあ、やっぱりいつ見てもグロいなあ……これ」

「う、うん」

さやかとまどかはその異様な空間を再び目にし、二人は身体を緊張で強張らせる。

「急ぎましょう、魔法はこの結界の最奥にいるはず。あまりもたもたしていたら、移動されてしまうかも……」

それから三人は魔法の結界内を歩き続けるが魔法はおろか、使い魔の姿も全く見当たらなかった。この異常な事態にマミは不安感を覚える。

「なんか、すごい静かじゃない？」

「うん。昨日私たちを襲った使い魔も全然見かけないし、変だよね……」

さやかもまどかもあまりの結界内の静けさに違和感を感じたのか、二人も不安げな表情でマミのそばを歩く。

「ううん、余りにもこれは静かすぎる。二人とも油断しないで。この結界、なにかおかしい……っ!?!」

マミはまどかとさやかに油断しないよう警戒を強めるが、その瞬間結界内に異常が起き始めた。

「うわあなに!?!じ、地震!?!」

「マミさん、一体どうなってるんですか!?!」

さやかもまどかも、何が起きているのか理解できずパニックになる。

「そんな、結界が崩壊している!?!どうして、まだ魔女は倒されていないはずなのに、どうなっているの!?!」

マミ自身もこの異常な状況が掴めず、マスケット銃を構えて周囲を警戒する。やがて結界の空間は段々崩れていき廃ビルへと戻っていく。そして結界の崩壊を引き起こした原因である一人の人物がマミたちの目の前に姿を現した。

「あなた、一体誰?!何者なの!?!」

突如目の前に現れた人物に、マミは一滴の脂汗を流しながらマスケット銃の銃口を向ける。まどかもさやかも、その異様な雰囲気とプレッシャーにも似た圧を放つ人物に怯え、マミの後ろへ隠れるように下がる。

「……」

そこに立っていたのは、恐らくは魔女の物だったであろう血で黒い大剣を真っ赤に染めた【仮面】の姿だった。

第六話

——マミたちが結界に侵入する数時間前

「転移してきたここならば、何かしら手掛かりになる痕跡を見つけれれると思っただが…何もないか」

【仮面】はこの世界のことを調べるついでにオラクルへの帰還のための手掛かりを探すため、昨日自分が転移してきた廃ビルに訪れていた。

一応自身の目でも確認しておくためこの世界のことやオラクルのことを人目を避けながら街を調べてまわってみたが、この世界に関する情報は多く手に入ったものの、オラクルに関する情報は何一つとして得られることはなかった。

そこで昨日自分が転移されたこの廃ビルならば何かしら小さな痕跡の一つや二つあるかもしれないと思って訪れてみたのだが、【仮面】の口ぶりからして、この廃ビルにも帰還に繋がる手掛かりは何もなかったようだ。

「結果として手に入ったのは地球に関する情報だけだったが…まあ、オラクルに関する情報は最初から期待していなかった訳だし、これでも十分な成果と言えるだろう」

しかしこの惑星、「地球」に関する情報はそれなりに手に入った。存在する原生種である人間、化学力、文化などといったその何もかもがオラクルの物と似ているようで少し違い、そして何より【仮面】が驚いたのは、地球とその外に広がる宇宙にはダーカーやダークファルス、そして【深遠なる闇】が存在しないということだ。

ダーカーはオラクルの世界の宇宙に存在する最大の脅威、【深遠なる闇】から生まれた意思を持たない闇の勢力の尖兵的存在だ。

ダーカーは常にその身体から生物や物質を汚染し侵食する因子、「ダーカー因子」を振りまき交戦した対象の身体をダーカー因子で汚染し自らの仲間とする。

そして同じく【深遠なる闇】より生まれ、ダーカーを統率する存在

である「ダークファルス」はダーカーと同じくダーカー因子によって身体を構成しているが、通常のダーカーと違うのは、因子そのものが意思を持ち、人間の言葉を解し対話することが可能と言える所だろう。

ダークファルスは自身の意思で対象を選び、その対象を侵食し乗っ取ることで自らの器として活動しており、尖兵であるダーカーなど比にならないほどの強大な力を持っている。

そしてそのダーカー及び、ダークファルスを生み出した存在である【深遠なる闇】に関しては未だにフォトナーが大昔に激戦の末に封印したということ以外は明らかになっていないが、ダークファルスを生み出したと聞けば【深遠なる闇】がどれ程強大で恐ろしい存在であるかは容易に想像が出来るだろう。

そんなダーカーたちが存在しない世界、それはオラクルの誰もが夢見て、アークスたちが実現するために今も戦い続けている世界だ。

「もし彼女が……マトイがこんな世界に生まれていたら、マトイはもつと笑って、もつと違う生き方を選んでいたのだろうか」

マトイは【仮面】にとって掛け替えのない大切な存在で、かつてアークスだった【仮面】がダークファルスとなり、時間遡行を何度も繰り返す理由となった少女だ。

どの時間軸でも皆を守るため全てのダークファルスの闇を背負い、そのたびに彼女は自身の命を絶ち、時には完全に【深遠なる闇】へと変貌しオラクルを滅ぼしてしまうこともあった。

【仮面】自身もマトイが自身の命を絶つたりかつての自分の仲間を消してしまうことが耐えられなかった、そしてなにより……。

——あなたに一つだけお願いがあるの……——泣かないで、笑って……

あの時のマトイの顔が頭から離れてくれない。

マトイはかつての自分に沢山の笑顔を与えてくれたし、何より自身にとつての心の支えでもあった。

だから今度は【仮面】が彼女に……マトイに皆と笑っていられる世界を与えてあげたい。そのために【仮面】はアークスであることを捨て

何度も時を繰り返し、ずっと一人で戦ってきたからこそ、考えてしま
うのだ。

もしもこんなダーカーのいない世界にマトイが生まれていたら
……と。

「考えるだけ無駄だな、そんなもしもの世界なんてなかった。

だからこそ私はダークファルスにまで成り果てて、今ここに存在し
ているのだから」

【仮面】は少し寂しそうに呟き、俯いた。

「さて、もうここに用はない。さっさと……む？」

暫くしたあと、【仮面】が廃ビルを去ろうとした瞬間、辺りの景色が
一変した。

壁は一面肉壁と化し、茨と薔薇がそこら中に張り巡らされており、
所々に巨大な鋏を抱えたタンポポのような容姿に髭を生やした生き
物がいた。

事前にキュウベえから聞いてはいたが、恐らくはこれが「魔女の結
界」というやつなのだろう。

「ああ、丁度探しにいらったと思うていた所だ。

そっちから来てくれて助かった」

【仮面】は仮面の下で薄く笑みを浮かべ、右手に黒い大剣を出現させ
て結界内を歩き始めた。

《○×△□！》

《壁縫コヲ髓後！殺者血セー！》

巨大な鋏を持った生き物達は【仮面】の姿を認識すると可愛らしい
顔を恐ろしく歪ませ、意味不明な言葉を発しながら鋏を振りかざし
【仮面】に真正面から襲いかかってきた。

「単純に突っ込んでくるだけとは、素人丸出しの動きだな」

《死ス刺刑爾フ！》

《△◇▽×！》

二体の異形は左右から巨大な鋏を【仮面】の首元にめがけて接近さ
せる。

「死ね」

《啞是!?!》

《×◇!?!》

【仮面】は異形の攻撃を紙一重で一步後ろに引いてかわし、黒い大剣を軽く横に振り二体の首をはね上げた。

二体の異形は奇抜な叫び声をあげながら絶命し、首がボトボトと地面に転がった。

【仮面】は転がった首の一つを掴み上げ、観察する。

「ふむ、これが使い魔というやつか。やはりダーカーとは根本的に存在が違うな……因子のような物も感じられないし、倒したからと言って交戦者に害がある訳でもない。私がこちら側に来た事で何かしら魔女達に変化が起きているかもと少し期待していたが、これも外れだったか」

【仮面】はつまらなさそうにため息をつき、使い魔の首を乱暴に後ろへ放り投げた。

「先ほどから感じるこの気配、結界の最奥だな。

強い力を感じる、確かに使い魔よりは強力な個体なのだろうが……」

これまで自身の前に立ちはだかる数多の強大な敵をなぎ倒してきた【仮面】にとってはこの程度の強さならなんてことはない。

仮に【仮面】より強大な力と強さを持つていようと、今回の敵のようには考えなしにその力を振り回すだけでは【仮面】の圧倒的な経験の差と戦闘技術には勝つことなど到底できないだろう。

「魔女の強さがどうであれ、今回は魔女結界がどのようなものなのかを知ればそれで十分だ。

とにかく今は魔女の元へ向かうのを先決するとしよう」

【仮面】は結界の奥に感じる魔女らしい気配を確認すると、最奥に向けて結界内を歩き始めた。

「やれやれ、ここまで数が多いとは……いくら弱いとは言えこうも

寄って集られては面倒だな」

あれから【仮面】は暫く結界内を歩き続けていた。

使い魔とも幾度か遭遇することはあったが全て切り伏せていた。

確かに一体一体は強くないが異常に数だけは多く、しかも無駄に連携を取ってくることもあった為流石に【仮面】も鬱陶しさを覚える。

「む、あれは」

そんな愚痴をこぼしながら歩き続けると前方に今までとは明らかに違う装飾が施された扉が現れた。

「この扉の先から強い気配を感じる、この奥に魔女が……」

扉の先から感じる今までの使い魔とは違う気配からして、この扉の先に魔女が待ち構えているのだろう。

【仮面】が扉を開けて足を踏み入れると、そこにはドームのような巨大な空間が広がっており、部屋の中央にはナメクジに蝶の羽を生やした巨大な異形がその体系に合わせたような巨大なソファーにもたれ掛かるように鎮座していた。

その巨大な異形の周りには先程交戦した使い魔達があり、崇めるような仕草をしながらその異形を取り囲んでいた。

恐らくはあれが今回【仮面】を結界に引きずりこんだ魔女本人だろう。

【仮面】は魔女の姿を確認すると黒い大剣を魔女に向けて構える。

《何箇ヨ!? 藻弥覇チヨ死!》

《可玖死! 殺刺※施ガ!》

【仮面】の存在に気付いた使い魔達は顔を恐ろしく歪ませ、次々と【仮面】へと襲い掛かる。

「……」

【仮面】は最初に接近してきた使い魔の身体を真つ二つに両断し次から次へとくる使い魔達の攻撃をかわしては切り伏せていく。

《捕刺タ! 死死▽死○死!》

「……っちー!」

前方から接近する使い魔を切ろうと大剣を振り上げると、【仮面】の後ろ上空を飛んでいた蝶のような使い魔が体から茨を放出し【仮面】

が大剣を握っていた右腕を拘束した。

それを好機と言わんばかりに前方から接近していた使い魔はさらにスピードを上げ、「仮面」に向かって剣を突き立て突進する。

「小賢しい真似をしてくれる……！」

【仮面】は少し苛立った声色でそう言うと、自身の足元に転がっている使い魔の死体が握っている巨大な剣を足で蹴り上げ、それを左手でキャッチし上空で自身の右腕を拘束している蝶のような使い魔へと向かって勢いよく投げつける。

《痛死イイ!?!弥…弥……》

【仮面】が投げつけた巨大な剣は見事上空にいた使い魔の顔に命中し、使い魔が絶命すると同時に右腕の拘束も解かれた。

そして【仮面】までもう少しの所まで接近していた使い魔も【仮面】から振り下ろされた大剣によつて身体を真つ二つにされ絶命した。

「残っているのは貴様だけだ、魔女」

魔女の周囲にいた使い魔をあらかた片付けた【仮面】は、未だに部屋の中で巨大なソファーに鎮座している魔女へ向けて、改めて大剣を構える。

《殺殺殺殺ウウー貴蘇刺魏ギイ!》

使い魔を殺されたことに怒っているのか、今まで静観していた魔女は【仮面】に大剣を向けられた途端に奇抜な鳴き声を上げ、自身が座っていた巨大なソファーから羽を飛ばたかせて飛び立ち、そのソファーを【仮面】に向かって身体で押し投げる。

「自分の可愛い手下が皆殺しにされて怒っているのか？」

良いだろう、仇を打ちたければ掛かってくるがいい」

【仮面】は大きく跳び、魔女が押し投じたソファーを踏み台にしてさらに上空への距離を稼ぎ、魔女の頭上まで上がる。

《魏魏戯!》

魔女は空中にいる【仮面】を拘束しようと身体から無数の茨を出し、放つ。

《拿是!?!》

「同じ手が二度も通じるものか」

【仮面】に向けて放たれた無数の茨はあっけなく全て切り伏せられ、【仮面】はそのまま落下の勢いに任せて魔女の背中に大剣で下突きをかまし、乱暴に大剣を引き抜く。

《痛痛痛イイ！癒瑠簞茄イ！》

引き抜かれた傷口からは大量のどす黒い血が勢い良く噴き出し、その痛みに悶えながら魔女は背中に乗っている【仮面】を振り落とそうと空間内を物凄い速さで滅茶苦茶に飛び回る。

「その巨体で良く動く……奮闘している所申し訳ないが、余り激しく動かれると面倒なのでな。」

「この羽を切らせて貰うぞ」

【仮面】を背中から振り落とそうと飛び回る魔女に対して【仮面】はそう言うと、大剣で魔女の巨大な羽の付け根を切断した。

《鑄魏妓義誼イイ！》

切断された羽の付け根からも大量の血が噴き出し、飛ぶ手段を失った魔女は鳴き声を上げながら成すすべも無く地面へと落下していく。

魔女が落下すると同時に【仮面】も魔女の背中から跳び、落下して悶えている魔女の前へと着地する。

「魔女と言ってもこの程度か、興ざめだ」

《殺殺ウウ！死刺嗣※唾▽○アア！》

今にも死にそうな魔女は怒りに身を任せて【仮面】に向かって突進する。

「終わりだ」

【仮面】は大剣に黒いエネルギーを纏わせた巨大なエネルギーの剣を形成し、突っ込んできた魔女を縦に真っ二つにした。

《誼魏戲義アア唾×彌イ……魏……魏……》

「……」

《……》

真っ二つにされて尚魔女は奇抜な鳴き声を上げ、別れた二つの身体は暫くその場でのたうち回り、やがて沈黙した。

すると魔女の身体はドロドロに溶けていき、その中心から黒い小さな球状の物体が出てくる。

「これがキュウベエの言っていたグリーンフシードか……。

私にとつては今の所何の価値もない代物だが、念のため回収しておくでしょう」

【仮面】はグリーンフシードを懐にしまい、主である魔女が死んだことにより結界も徐々に崩れていき、辺りの景色も元の廃ビルへと戻っていく。

「あなた、一体何者!?!」

【仮面】は突如背後から声を掛けられる。

「……」

【仮面】が黙って顔だけを少し後ろに向けると、そこにはマスクेट銃をこちらに向けて構えた金髪ロールの魔法少女……バマミとその後ろに怯えるように隠れる鹿目まどかと美樹さやか姿があった。

第七話

「あなたは誰？…一体何者なの？」

マミは目の前にいる仮面の男、【仮面】にマスキット銃の銃口を向けて問う。

「……」

【仮面】はマミの問いには答えず、沈黙したままマミとその後ろに居るさやかとまどかかをじつと見据える。

「何？何なのあいつ……気味悪い。」

人間なの……？」

「魔女ではないみたいだけど……」

黙ったままこちらを見つめる異様な雰囲気を放つ仮面の男を不気味に思ったのか、各々【仮面】を見た感想を口にする。

「鹿目さん美樹さん下がって……あの人、上手くは言えないけどとても危険な感じがする……」

「マミさん……」

マミは今までにないくらいの険しい表情で、まどかとさやかに警戒を促す。

そんなマミの険しい表情を見て、まどかは不安になる。

「ここにあつた魔女の結界が先程崩壊したのだけれど、魔女を倒したのはあなた？」

「……」

再び問うマミに対し、【仮面】は沈黙したままマミ達の方へとゆっくり歩き始める。

「マ、マミさん……！」

「動かないで、それ以上こっちに来るなら撃つわよ！」

「……」

突然こちらへ歩き始めた【仮面】にさやかは驚き、怯えながら先程よりもマミの傍へ寄る。

マミはこちらへ近づいてくる【仮面】に対して警告をするが、【仮面】はマミからの警告に構わず歩き続ける。

「警告はしたわよー！」

ママは警告を無視して更に近づいてくる【仮面】へマスキット銃の弾丸を放った。

「つな!？」

「うそ……今のを防いだの?」

「そんな……」

マスキット銃から放たれた一発の弾丸は【仮面】の握っていた大剣によって弾かれていた。

ママは【仮面】が弾丸を弾いたことへ驚きの声を上げ、その信じられない光景を目にしたさやかとまどかもママと同じく動揺する。

「つくー!」

ママは六丁のマスキット銃を横に展開し【仮面】へと同時に発砲するが、【仮面】はママ達へ近づきながらも全ての弾丸を大剣で弾く。

「嘘でしょ……?」

六発全ての弾を弾かれママも目の前の光景が信じられない様子でいた。

「……」

そしてとうとう【仮面】がママ達の目の前まで来ると、【仮面】以外のその場にいる全員が緊張で固まってしまう。

このままでは三人とも殺されてしまう……。

ママはそう思い固まりながらもこの状況を打破するため思考を巡らす。

「あ……」

だが【仮面】はママ達の横を素通りし、廃ビルの出口の方へと歩いて行っていた。

ママは【仮面】のその様子を見て、小さく間の抜けた声を出す。

そして廃ビルの出口へたどり着いた【仮面】はそこで足を止めた。

「……鹿目まどか」

「え?」

【仮面】の低くノイズが混じったような声に、自分の名前を呼ばれたまどかはビクツと身体を震わせ反応する。

【仮面】がまどかの名前を呼んだあと、彼の周りには黒い闇が出現し【仮面】を飲み込むように包み込んで消えていった。

【仮面】が消えたのを確認すると、緊張が解けたのかさやかとまどかは口を開く。

「消えた？」

「退いてくれたのかな？」

「そう……みたいね」

「ママさん!？」

「大丈夫ですか!？」

「ええ、大丈夫、緊張が解けて力が抜けたみたい」

ママも先程の緊迫した状況から解放され身体の全身の力が抜けたことにより、少しふらついた。

さやかもまどかもふらついたママへと駆け寄り身体を支える。

「あの仮面野郎何者？最後にまどかの名前を呼んでたけど。」

まどかの知り合い……じゃないよね、明らかに」

「うん、私も今初めて会ったと……思う」

さやかは【仮面】が最後にまどかの名前を呼んだことに疑問を持ったが、勿論まどかは【仮面】との面識など今まで一度もなく、今回会ったのが初めてである。

まどかも初対面の相手が自分の名前を知っていたことを不思議に思いながら、さやかの疑問に答える。

「今回はあっちが退いてくれたから良かったけど、あのままともに交戦していたら危なかったわね。二人ともケガはない?」

「はい!大丈夫です!」

「ママさんが守ってくれましたから」

ママは二人に身体を支えられながらさやかとまどかのケガの有無を確認し、二人共にケガは見当たらず、さやかもまどかもママからの心配に笑顔で答えた。

二人の無事を確認できたママは安心してホッと胸をなでおろす。

「でも本当にあの仮面野郎、何者なんだろう」

「魔女を倒してたみたいだから悪い人ではないと思うけど……」

さやかは【仮面】の魔女とも人間とも取れないあの雰囲気と姿を思い出す。まどかは魔女を倒していたことから悪者ではないだろうと口にするが、マミはまどかのその言葉を聞いて再び顔を陰しくさせ首を横に振る。

「何にしても、仮面の彼がどういう存在かわからない以上は警戒しないと……。」

魔女を倒していたからと言って、私たちの敵ではないとは言えないわ。実際、さつき戦闘になりかけたし、縄張り意識の強い魔法少女の例もあるしね」

「そうですね……。」

マミの言葉を聞いたまどかは少し顔を暗くし頷く。

魔女を倒していたのだから自分たちの味方であって欲しいし、悪い者だとは思いたくないまどかの気持ちはマミ自身も十分理解はしているのだが、魔法少女同志の縄張り争いの例を考えるとどうしても簡単には信用はできない。

こちらが先に手を出してしまったとは言え、マミの問いを無視し去っていったことから対話の意思も【仮面】からは感じられなかった。

対話の意思がないのでは仮に悪人ではないにしても協力するとうのは難しいだろう。

「でも魔女の結界から抜け出せたってことは、やっぱり魔女はあの仮面野郎が倒したってことでいいんですか？」

さやかは重くなった空気を切り替えるために、ここに結界を張っていた魔女について話題を振る。

「魔女の結界は結界の主である魔女が倒されない限り崩壊はしないから、それが崩壊したってことは仮面の彼が魔女を倒してくれたのは間違いないわ。暁美さんもそうだけど、仮面の彼についてもわからないことだらけだし、今後キュウベえと相談ね。」

マミは少し疲れたような笑顔でそういうと、変身を解いて廃ビルの出口へと向かって歩き始める。

「さ、今日はもう帰りましょう。魔女はいないのだし、この場で私たちにできることは何も無いわ。」

今日のことは私からキュウベえに報告しておくから、美樹さんも鹿目さんも今日はゆつくり休んでね」

「わかりました」

「……はい」

さやかもまどかもママの後に続いて歩き始め、廃ビルを出る。

廃ビルをでると辺りは既に暗くなっており、さやかとまどかは思っていたより時間が経過していたことに驚き急いで家へ帰ろうとする。

また使い魔などの結界に捕らえられるかもしれないということ、途中までママも二人について送ってくれた。

「あ、ママさん。あたしはここまで大丈夫です！わざわざ送っていただいてありがとうございます！」

暫く歩いてさやかは自身の家が近くにある通りまで出ると、ここまですて送ってくれたママへ声をかけて感謝をつける。

「わかったわ。気を付けて帰るのよ美樹さん。また明日学校でね」

「はい！まどかも、また明日ね！」

「バイバイさやかちゃん、また明日」

そう言うと、さやかはママとまどかに手を振って自身の家の方へと走っていき、さやかの姿が見えなくなると、ママとまどかは再びまどかの家へと向かって歩き始める。

暫くママとまどかの間に沈黙が流れたまま二人は歩き続けたが、ママがまどかに声をかけた。

「鹿目さん、ごめんね」

「……え!?!」

突然謝罪をするママにまどかは驚いた。なぜ謝るのだろうか……。そんな疑問がまどかの頭によぎり、困惑する。

まどかのそのあたふたとした反応を見たママはクスツと小さく笑い、話を再開する。

「あれだけ美樹さんと鹿目さんを守る、なんてかつこよく言っておいてあの仮面の彼を前にした時なんか、あんな風に取り乱しちやっ二人に情けない姿を見せちゃった……」

ママはあの廃ビルで遭遇した仮面の男、【仮面】と対峙した際の自分

の不甲斐なさを気にしていたのか、あれだけ二人を守ると言ったのに自分を信じてくれたさやかとまどかに情けない姿を見せてしまったことに對してママは罪悪感を抱いていた。

「頼りない私のせいで美樹さんと鹿目さんをあんな危険な目に合わせちゃって……本当にごめんなさい」

そう言つてママは重ねて謝罪をする。

「そんな……そんなことありません！」

ママの話を黙つて聞いていたまどかは、珍しく声をあげてママへ訴えた。

「鹿目さん……？」

ママはそう訴えるまどかに驚き目を丸くする。夜の静まりきつた通りの中、まどかは言葉を繋げる。

「あんな凄いプレッシャーと威圧感を前にしても、ママさんは私とさやかちゃんの前に立って最後まで守ってくれました。きつと私があの場のママさんの立場になっていたら、きつと怖くなって逃げだしていたと思います。」

ママさんがいくら自分のことを頼りないって思つても私は絶対そうは思いません！さやかちゃんだつて絶対そう言います！だから、そんなこと言わないでください……。ママさんは私とさやかちゃんにとつて、間違いなく頼りになる先輩です！」

まどかは自身の思いを告げると、ママの目をまっすぐに見つめる。

「……だめだなあ、私。先輩なんだからもつとたくましくなくっちゃいけない筈なのに、こんな可愛い後輩にお説教されるなんて、まだまだ魔法少女としても先輩としても未熟だわ」

ママは少し涙目ながらもまどかのおでこを人差し指でつつつついて笑顔をみせてみせる。

「ご、ごめんなさい！」

まどかは自分がママに説教じみた話をしてしまったことに気づいて、顔を赤くして急いで謝る。

その様子をみたママはクスッと笑いまどかの頭を撫でながらまどかに言う。

「冗談よ、意地悪してごめんね。……でもありがとう。可愛い後輩二人のためにももつと頑張つてカッコいいところ見せなきゃね」

「マミさん……」

マミがそう言つてまどかに笑顔を見せるとまどかも笑顔でそれに応える。

「ほら鹿目さん、家についたわよ」

話が終わると同時に、丁度まどかの家の前まで歩いていた。

「あのマミさん、今日は本当にありがとうございました！」

「気にしないで、また明日学校で会いましょう。おやすみなさい、鹿目さん」

「はいー」

別れを告げるまどかにマミが笑顔でそう言つと、まどかも笑顔で返事をし、手を振つた。

まどかが家の中に入ったのを確認したマミも、自身の家へ帰るべく再び歩き始める。

(強くならなくちゃ……。二人を守るためにも)

——同時刻、見滝原の街の離れにある丘

「三人に会つたのかい？」

キュウベえは目の前にいる仮面をつけた男、【仮面】に話しかける。

丘から見滝原の街を眺めていた【仮面】はキュウベえの存在を確認するとキュウベえには顔を向けず、街を眺めたまま静かに話し始める。

「偶然な、魔女を倒した際の結界の崩壊時直後に鉢合わせした。恐らくは彼女達もあの廃ビルにいた魔女を追ってきていたんだろう」

【仮面】は昨日自身が転移された廃ビルにて魔女と交戦した際、バ MMI、鹿目まどか、美樹さやかと遭遇したことをキュウベえに伝える。

「ということはマミ達と顔合わせはできたみたいだね。それは良かった」

たよ。」

「あれを顔合わせと言っているのか、こちらからは何もしていないが、向こうからは銃を数発撃たれた。まあ、あの状況では仕方ないとは思うが、結果として相手からは警戒されることになった」

「だから言っただじやないか。三人には事前に顔を出してキミの事を知ってもらった方が物事が円滑に進むって」

キユウベえは以前の自分の提案を実行しなかったことによる不満を【仮面】に告げる。

「それこそ私も前に言っただ、彼女達の面倒ごとには巻き込まれたくない。最も、姿を見られた以上はそれも難しいだろうが」

「これから一体どうする気だい？」

キユウベえは首を傾げる動作をして【仮面】の方に顔をみやる。

「今までとさして変わらない、私自身は彼女達とは極力関わらない」と言うところ。

「貴様を通してバママ達と行動を共にするのは構わないが、私個人が彼女達と関わり合うことはしない。前にも言った通り、私は魔法少女と魔女の闘いに興味などない。私が今こうしているのは、私がいた元の世界に帰るためだ。必要以上に彼女達と関わり、ここに長くどまるつもりは毛頭ない」

姿を見られず全てのことを終えられればベストだったが、姿を見られてしまったてはそうもいかない。

であれば「仕事」として彼女達と行動を共にし、個人ではなるべく関わらないよう立ち回るのが今の所妥当であろう。

【仮面】にも余裕があるわけではない、オラクルでは今もマトイが苦しみの連鎖に囚われている。

可能ならば今すぐにでも帰還したい所ではあるが、現状キユウベえに協力するほか帰還手段がないのであれば、そうするしかないのだ。「それなら僕の方からキミのことはママ達に説明しておくよ。ただ、僕にもやることがあったね。しばらくママ達には会えそうにないからキミの説明は少し後になると思うけど、いいかな？」

「まあ、私が自分で説明しようにも信用などされないだろうからな」

【仮面】 からの了承を得たキュウベえは、その場から去ろうとする。
「待て」

だが【仮面】によって呼び止められる。

「まだ何かあるのかい？」

「貴様に魔女について聞いておきたいことがある」

先程までの静かで落ち着いた【仮面】の声色が少し重くなり、【仮面】は去ろうとするキュウベえの方へと向く。

魔女に関する質問ということで、キュウベえも再び【仮面】の方へと身体を向ける。

「何かな？」

キュウベえは首を傾げ、【仮面】からの質問を待つ。それから少し間を置いて、【仮面】はキュウベえに問う。

「単刀直入に問う、あの魔女はなんだ」

【仮面】から投げかけられた疑問、それは魔女という者が「何なのか」ということ。

「それはどういう意味で言っているのかな？」

「そのままの意味だ、以前貴様は魔女を「絶望から生まれる存在」と言っていたが、先程交戦した魔女が行使していた力そのものは、以前対峙した暁美ほむらや巴マミといった魔法少女に極めて近い魔力のように感じた」

「……………」

【仮面】の話をきいているキュウベえは何を言うでもなく、沈黙したまま【仮面】を見つめる。

「…………アレは元々魔法少女なのではないか？魔力の事と言い、貴様から受けた説明と、私が直接対峙した際の印象にどうにもズレがある」

【仮面】は自身の魔女に対する考えを全て告げると、キュウベえを見る。

「…………」

「沈黙を続けるということは正解と受け取っていいのか？」

【仮面】を黙って見つめていたキュウベえだが、【仮面】に正解か否かと問われてようやく口を開く。

「仮にそうだとして、キミはその事実をママ達に伝えるつもりかい？」
「まさか、言う訳が無いだろう。魔法少女になつてしまった以上、遅かれ早かれ知ることになるんだ。であれば今事実を知ろうが後に知つていくら嘆こうが最終的に魔女になるという事実は変わらないし、どうすることもできない。第一、私の口からこの事実を伝えた所で信用などされん。そうだろう？」

確かにあのような事があつたのに、その人物から突然「お前はいずれ魔女になる」などと言われても信用など到底無理な話だろう。

それに魔法少女が魔女になるという事を知つた所で【仮面】はどうとも思わないしそれを知つてどうしようとも思わない。

【仮面】にとっては「ただその事を知つた」程度の認識にしかならないのだ。

「……キミの言う通りだよ。魔女とは魔法少女がため込んだ絶望を糧にして生まれる存在だ。

穢れをため込みすぎたソウルジェムはやがてグリーンフィードとなり、魔法少女は魔女として生まれ変わる。いずれ魔女になる少女、それが魔法少女だ」

キュウベえは少し間を置いて、【仮面】の推測は事実だということ伝える。

「彼女達はその事実を知らないまま魔女と戦い続けているのだろうか？それを事前に伝ええない貴様も大概だが、何の疑いもなく必死に魔女と戦っている連中も滑稽だな」

「その言い方には語弊があるね。彼女達はその事実を知らないのはそもそも彼女達自身が知ろうとしないからさ。

魔女は絶望から生まれる、ただそれだけの説明で彼女達魔法少女の大半は納得して追及はしない」

「つまりは、「聞かれなかつたから言わなかつた」……と？」
「そういうことだね」

【仮面】はこれで理解した、このキュウベえという奴が持っている人間やその他に対する価値観の違いを。

こいつには他者を騙しているという自覚などなく、ただひたすらに

少女と契約を交わし、魔女と戦わせて用がすめばそこで切り捨てる。その行為には意思も感情もなく、願いを叶えた事に対する当たり前の対価としか思わないのだ。

この世界に転移させられた際に理不尽な契約を持ち込まれた時から信用などしていなかったが、ここまで質が悪いとは……。

「聞きたいことは全て聞いた、もういい。消えろ」

確認しておきたかった事をキュウベえに聞き終えると、【仮面】はキュウベえに再び背を向けて、言い放つ。

するとキュウベえも【仮面】に背を向けて夜の闇へと姿を消していった。

「同情をするわけではないが……ああ、お気の毒にな」

キュウベえがいなくなり、【仮面】はポツリと、ただその一言だけを呟いた。

第八話

「テイロ・ファイナーレ！」

《嗣愚アア唾阿!》

巴マミによるリボンにより構成された巨大な大砲から放たれた一発の弾丸は、彼女の目の前にいる異形へと命中し、弾が直撃した異形は奇抜なうめき声をあげながら消滅する。

「やったあー！」

異形が完全に消滅すると、物陰に隠れていた二人の少女、美樹さやかと鹿目まどかが走ってマミの元へ駆け寄り、ガッツポーズを取りながらマミの勝利への喜びの声をあげて近づくと、後から続くまどかの無事を確認したマミは二人に笑顔を向ける。

「二人ともケガはない？」

「はい、大丈夫です」

「いやあ、流石マミさん！ やっぱりマミさんはかつこいいなあ！」

【仮面】との遭遇から一日たち、まどかとさやかはマミの魔女討伐に同行していた。

昨日の魔女討伐の見学は【仮面】が既に倒して流れてしまったため、学校が終わった放課後、まどかとさやかはマミに今日の魔女討伐に同行させてほしいと申し出ていた。

マミは昨日の【仮面】との一件のこともあったため、マミは二人の申し出に対して最初はあまりいい顔はしていなかったが、まどかとさやかの一生懸命お願いする姿を見て考えた結果、今回の魔女討伐に同行することを許可した。

「あれ、グリーンシードが見当たりませんかけど落とさなかつたんですかね？」

「ほんとだ、どうして?」

さやかは異形が消滅した場所を確認するが、本来魔女が落とすはずのグリーンシードがどこにも見当たらず辺りを見渡す。

まどかもさやかと一緒に辺りを確認するが、やはりグリーンシード

は見当たらずさやかと同じく疑問の声をあげる。

「今のは魔女じゃなくて魔女の使い魔ね、グリーンシードは持ってないわ」

使い魔とは、その名の通り魔女の手下のような存在であり、魔女の自己実現のサポートや魔女が敵に襲われた際の防衛を行う戦闘員だ。

とはいってもその存在の大半は無能か利己的で、魔女からの命令はロクに果たせないため正直使い魔として存在する意味はそれほど無い。

今回倒した異形はマミの言う通り魔女ではないことからグリーンシードを落とすことはないが、放っておけばいずれ魔女に成長しグリーンシードも孕むため、あえて魔女に成長するまで放置する魔法少女もおり、むしろマミのように使い魔までしっかりと倒す魔法少女の方が割合的には少ない。

「じゃあ今回は外れかー…残念」

「使い魔と言っても魔女と同じで人間を襲うから、放っておく訳にはいかないわ。時間がたてば、いずれ魔女にも成長して沢山の人が危険に晒されてしまう。そんなの、絶対に見過ごせない」

「マミさん……」

さやかの「外れ」という言葉にマミは険しい表情をし、少し俯きながら握りこぶしを作り力を込め、そんなマミの様子をみたまどかは、俯くマミの顔をのぞきこみながら心配した様子で声をかける。

一方でさやかは自分が言ってしまった失言に後悔をし、マミに頭を下げる。

「ご、ごめんなさい！マミさん……」

マミは頭を下げるさやかのことを見て、ハツとした表情をしてすぐにさやかにフォローを入れる。

「ち、違うの美樹さん！別に美樹さんを責めてる訳じゃないの！ただ、使い魔も放っておくと危険だから見つけたら出来るだけ倒していった方が良いつてことを言いたかったただだから……ごめんね？」

「そんな、マミさんが頭を下げる必要なんてありません！悪いのは私ですから！」

そう言つて同じくさやかに頭を下げたマミに、今度がさやかがフオローを入れて、またマミへ頭を下げる。

そんな二人のやり取りの繰り返しがおかしくなったのか、まどかは少し微笑みながらその様子を見ていた。

「ちよ、まどか！何笑つてんのよお！」

「ふふ、ごめん。何だかお互いに謝り続けてる二人を見てたらおかしくなっちゃって」

「もう、鹿目さんったら…」

和やかな雰囲気になり今の自分たちの状況を改めて考えた三人は、おかしくなり笑いあう。

「さあ、もう辺りに魔女も使い魔の魔力も感じないし、今日はもう帰りましょうか」

魔女討伐のパトロールを始めた時はまだ明るかったが、パトロールが終わる頃には辺りも少し暗くなり始めていた。

「マミさん、まどか。あたしはちよつとこれから寄る所があるから、お先に失礼しますね！」

「寄る所つて…上条君の所へお見舞い？」

「上条君…つて誰？美樹さんのお知り合い？」

マミはまどかの言う上条君について気になり、まどかに問う。

「上条君はさやかちゃんの子なんですけど、事故で身体をケガしちゃつて…今は病院に入院してるんです」

「あら、そうなの…でも急がないとお見舞いの受付時間も終わっちゃうわね。時間を取らせてごめんなさい、美樹さん」

「いえ、気にしないでください！では、失礼します。マミさん、まどか、また明日！」

「ええ、また明日ね」

「またね、さやかちゃん」

そう言つてさやかはマミとさやかに手を振って病院へ走って行き、それに対してマミもまどかも笑顔で手を振って姿が見えなくなるまで見送った。

「さ、私達もそろそろ帰りましょうか。途中まで一緒に帰りましょう、

鹿目さん」

「はい」

さやかを見送ったマミとまどかも、それぞれの家へ帰るため歩き始める。

それから暫く歩いている間も、マミとまどかはお互いのプライベートや学校での生活についての話で盛り上がっていたが、突然マミがその場で立ち止まる。

突然立ち止まったマミが気になり、その様子を見たまどかはマミに声をかけた。

「……」

「マミさん？どうしたんですか……あ」

マミが見つめる方向にまどかが目をやると、そこには一人の人物が立っていた。

「ほむらちゃん……」

「鹿目さん、下がってて。前にも話した通り彼女は危険よ」

そこにいたのは、マミと同じくこの見滝原の街で魔法少女として活動している少女、暁美ほむらだった。

ほむらを見つめるマミの目は鋭く、マミとほむらの間にはピリピリとした空気が張り詰める。

「本人を目の前にして”危険”だなんて、随分と失礼な物言いね。バ
マミ」

静まり返ったピリピリとした空気の中、最初に沈黙を破ったのはほむらだった。

険しい表情で自分の事を”危険”だと言うマミに対して、ほむらは顔の表情を一切崩す事もなく落ち着いて、かつ鋭い声色でマミへと言葉を返す。

「一般人の鹿目まどかと美樹さやかを魔女の討伐に付き合わせて、一体どう言うつもりなの？あなたと違って、彼女達は魔女や使い魔と戦える訳じゃない。バマミ、あなたこそ自分がしている事の危険性をしっかり理解出来ているのかしら」

ほむらは一般人であるまどかやさやかを魔女討伐に付き合わせる

事の危険性をマミに問い正すと、それに対し急いでまどかが前に出てほむらに訳を説明しようとする。

「違うのほむらちゃん！これは私ときやかちゃんがマミさんに…」

「鹿目さん、大丈夫。……暁美さん、あなたの言いたい事はわかるけど、私もそれを理解した上で彼女達を同行させてるわ。それに、この見滝原でずっと戦ってきたんだもの、私だって弱くない。それは暁美さん、あなただって知っているでしょう？」

前に出て説明をしようとするまどかに対して、マミは手を出して抑え、代わりにほむらに説明をするが、それを聞いていたほむらは少し目を鋭くさせマミに言葉を返す。

「あなた自身が強いとか弱いの問題ではないわ。万が一魔女の結界内で二人に何かあったらどうするのかと聞いているの。あなたの強さなら私も理解はしているけれど、だからってそれを理由に一般人である鹿目まどかと美樹さやかを連れ回して良い筈がないでしょう？二人に同行を頼まれたにしても、そこは先輩としてハッキリ駄目なものに、あなたは責任を取れるの？」

「それは……」

「二人に何かあったら責任を取れるのか」……というワードにマミは言葉を詰まらせてしまう。

確かにマミ自身がいくら強くとも、毎回二人を守りきれる保証などどこにもない。

ましてや、結界内は完全に魔女が支配する未知の領域だ。

魔法少女が一人に対して結界内は魔女だけじゃなく使い魔までいるため、数で押されてしまえばマミ本人だけならまだしも一般人であるまどかとさやかを毎回マミ一人で守りきると言うのは厳しいだろう。

実際マミ自身もそう感じてしまう事が無かった訳ではない、だからこそ何も言い返せなくなってしまおう。

「鹿目まどか」

「何……？ほむらちゃん」

ママが反論してこなくなると、今度はまどかに対してほむらは鋭い視線を向ける。

「前にあなたに言った忠告、覚えてる?」

「忠告って…キュウベえには関わるなって言ってた話のこと?」

「ええ、覚えているように何よりだわ。だからその上で質問させて貰うけど、どうしてあなたはまだキュウベえとの関係を持っているのかしら。あなた、家族や友人を大切に思ってるって言っていたわよね?なのに何故自らそれを壊すような事をし続けるの?」

「それは、その……」

ほむらからの問いに対し、まどかはほむらからの鋭い視線に怯えたように縮こまってしまいそうになるが、震えながらもほむらの目を真っ直ぐに見て、言う。

「私は家族のことも友達のこと、すごく大切だと思っててる。でも私は、キュウベえが私達を騙しているなんて思いたくないし、ほむらちゃんのこと信じたい……。優柔不断だって言われても仕方ないし、すごく自分勝手な理由だっかわかってる。でも、自分の目で見えて、自分でどうするかを決めたいの。私自身が後悔をしないためにも」

「………」

「鹿目さん……」

まどかの話を聞いたほむらは暫く黙っていたが、今まで何も変わらぬ表情と口調で言葉を返す。

「……あなたがどう言おうと、私は自分の考えを変えるつもりはないし、私が間違っているとも思わない。だからもう一度、私の言った事を踏まえてよく考えてみて。今ならまだ、間に合うわ」

「ほむらちゃん……」

ほむらはそう言うとその場から去ろうとするが、今まで黙っていたママが何かを思い出したように表情を変え、ほむらを呼び止める。

「待って、暁美さん!」

「……まだ何か反論があるの?」

「そうじゃないわ。あなたに聞いておきたい事があって」

「……何かしら」

ママが呼び止めるとほむらは少し不機嫌な声色でママに対応するが、質問の了承を得たママはほむらに聞いたかった事を質問する。

「昨日、魔女を追っている時に魔女を倒してる黒い仮面を付けた男性に会ったのだけど、暁美さんは何か知っている事は無いかしら」

ママは昨日の魔女討伐の際、結界崩壊時に遭遇した黒い仮面を付けた男についてほむらに知っている事はないかと聞く。

「黒い仮面を付けた男性…?」【仮面】のことを言っているのかしら

【仮面】……ほむらは暫く考え込んだ後、以前自分が対峙した仮面の男、【仮面】の名前を口にする。

「【仮面】…それが彼の名前なの?」

「あなたの言う黒い仮面を付けた男性が誰のことを指しているのかはわからないけど、少なくとも私が以前会ったことのある仮面の男は【仮面】とキュウベえが呼んでいたわ。キュウベえと一緒に行動していたから、私はてっきりあなた達の仲間だと思ってたけど、違うの?」
「いいえ、知らないわ。私もキュウベえに仮面の彼について聞こうと思っただけど、昨日からいくら呼び掛けても返事をしてくれないの…。暁美さんは何か知らない?」

話を聞く限り昨日ママ達が遭遇した仮面の男性とほむらが以前対峙した仮面の男はどうやら同一人物らしいが、ほむらもママもお互いに【仮面】の事は何も知らないようだ。

キュウベえに【仮面】のことを聞こうにも、テレパシーの呼びかけにも反応がないため、ママはキュウベえの行方をほむらに聞くがほむらは首を横に振って答える。

「さあ? 私にはキュウベえの考えてることなんて良く分からないから、テレパシーにも応じないなら何か取り込み中なんじゃない?」

「そう……」

「もう良いかしら? 私もやる事があるから、話が終わりならもう行くわ」

そう言ってほむらはママ達に背を向け歩き出す。

その様子を見ていたまどかはほむらに何かを言おうとしたが、いざ声をかけようとするとうとう言葉にして伝えれば良いのか自分でも分

からなくなり、言葉をかけられないでいた。

「ほむらちゃん……」

まどかは何も言うことができず、去って行くほむらの背中を見ながらただ黙ることしかできなかつた。

——見滝原市内の病院

「ふうー……よしー」

見滝原市にある病院、さやかはマミ達と別れた後幼馴染である上条恭介が入院しているこの病院へ訪れていた。

暫く病室に入るタイミングを伺っていたが、恭介に会う覚悟を決めると彼のいる病室へと足を踏み入れる。

「恭介ー」

さやかは病室に入るなり、ベッドの上で窓から夕日に照らされる街の景色を見ていた一人の少年の名前を呼びかける。

名前を呼ばれた少年、上条恭介はさやかに存在に気付くとさやかの方へと顔を向け笑顔を見せた。

「やさやか。お見舞いに来てくれたのかい？」

「うん、ちよつといつもより遅くなっちゃったけど……。あ、そうだ！はいこれ」

そう言うときやかは自身が持つてる学校のカバンから一枚のCDを取り出し、恭介に手渡す。

「うわあ！ありがとう。このCD、廃版でもう手に入らないレア物だよー」

「そ、そうなの？」

恭介はさやかからCDを受け取るなり目を輝かせて喜び、ベッドの隣にある机の上からCDプレーヤーを取りCDをセットする。

イヤホンをプレーヤーをの差込口にいれると、イヤホンの片方をさやかの方へ手渡す。

「さやかも一緒に聴こうよ。はい」

「え……ああ！うん」

さやかは手渡されたイヤホンの片方を耳に取り付け、恭介と一緒にCDから流れるバイオリンの演奏を聴き始める。

「うん、やっぱりこの人の演奏はすごいや……。聴き入っちゃうよ」

「そ、そうだね」

恭介は目を閉じて演奏に聴き入っているが、さやかは先程からソワソワしていて落ち着きがない。

なぜかと言えば、今の二人の状況を見れば理由はすぐにわかる。

「……」

（恭介……！ち、ちかい……！）

そう、今二人の距離がものすごく近いのだ。

恭介は演奏に聴き入ってるからか全く気にしている様子はないが、さやかは演奏に聴き入ろうとも恭介のことが気になってどうしても落ち着けない。

こういった恭介と密着するシチュエーションはさやかにとっては嬉しいはずなのだが、実際にこのような展開になるとなんとテンパってしまう。

（ああもうあたし何やってんのよ！何もテンパる必要なんてないじゃない……！ってあれ？）

暫くテンパっていたさやかだったが、ふと恭介の方を見ると恭介の肩が小さく震えているのに気付いた。

その様子を気になったさやかは恭介の顔を覗き込む。

「…恭介？」

「……」

恭介は泣いていたのだ。

さやかに気づかれないうちに彼女から顔をそらしていたが、恭介の様子が気になったさやかが顔を覗き込んだことでばれてしまった。

「ごめん、さやか。急に泣いたりなんかして……」

「き、気にしないで！大丈夫だから！」

さやかに気づかれた恭介は急いで涙を患者服の袖で拭い、さやかに

謝る。

一方でさやかは恭介を気遣い大丈夫だとあたふたしながらも伝え
た。

「さやか、今日はもうお見舞いは大丈夫。来てくれて、ありがとう」

「う、うん……でも、無理はしないでね」

「うん、ありがとう」

恭介自身この自分が作ってしまったこの気まずい雰囲気申し訳
なく感じたのか、さやかに見舞いにくしてくれたことに感謝を述べ、今
日は帰ってもらうように伝えた。

さやかはもう少し恭介と一緒に居たかったが、本人が言うのであれ
ば仕方ないので名残惜しかったが今日はもう帰ることにした。

病室を出て病院のガラス張りになっていいる所から外を覗くと辺り
は真つ暗になっており、通りにあるいくつかの街灯や病院から少し離
れた所にある繁華街などのネオンが光っていた。

「もうこんな時間……急いで帰らないと」

さやかは病院を出ると、自身の家がある方角へ走りだす。

だが、走っている途中でさやかは何か違和感を感じ取り、一度立ち
止まって周囲を見る。

「あれ、どこよ……。ここまでくると家に続く通りに出られた筈
なのに……」

いつもであれば知ってる通りに出たはずなのに、なぜか今日に限つ
て全く見覚えのない街のような場所へたどり着いていた。

確かに病院から少し離れた所に見滝原の繁華街はあるが、今さやか
の居るこの街は見慣れた繁華街などではなく完全に自身が知らない
街だった。

ビルのような建物に薄く光る街灯、人気も全くなく、そして街の真
ん中には大き目に作られた道路が伸びており、そんな光景がどこまで
も続いていた。

「街……なんだよね？……。でもなんか、人気も全然ないし気味悪い
……」

余りにも異質な雰囲気漂う街を不気味に思ったさやかは、少しで

も早く街から抜けようと走りですが、いつまでたっても街の外にはたどり着かず、どれだけ走ってもずっと同じような景色が続くばかりだった。

「もう、どうなってんのよ！いつまでたっても街の外に出られないじゃない！」

さやかはいつまでたっても不気味な街から抜けだせないことへの不安と怒りが混ざり、さやかは大きな声を上げて気持ちを落ち着かせようとする。

だが、そんなさやかの叫び声で気づいたのか、街のあちこちの陰から今まで姿を現さなかった街の住人達が出てきた。

「な…なに、なんなのあんた達。こっち来ないでよ…」

街の陰からでてきたのは全身が黒い煙で覆われており、所々に体からパイプが突き出た異形達だった。

さやかを視認した異形達はその巨体をフラフラと揺らしながらさやかへ接近する。

見知らぬ異質な街にここに存在する人間とはかけ離れた姿をした異形達、これらを見たさやかは自分が置かれてる今の状況をようやく理解した。

「っ…まさか…：…魔女の結界?!」

魔女の結界、一度目はまどかとビルの廃墟で、二度目はマミとまどか三人で魔女を倒すために侵入した異世界の結界。

さやか自身全く自覚がないままいつの間にかこの結界へ侵入してしまっていたようだ。

前回はマミが一緒にいたから何とか無事だったが、今この場にいるのはさやかのみ。

戦うことの出来ない今のさやかでは逃げることしかできなかったが、幸いにもこの結界の使い魔である異形達の足は遅く、さやかの足でもなんとか使い魔達との距離はとれていた…：…だが。

「もう、こいつら数多すぎでしょー！」

そう、足は遅いが数が異常に多く、どれだけ走って使い魔から距離を開けてもすぐに近場の陰から新しい使い魔が次から次へと這い出

てくる。

足は遅くとも、少しずつ数を増やして着実にさやかを追い詰めていく。

やがて走っていたさやかは息を切らして、その場で躓いてしまう。

「もう、駄目……」

気が付けばさやかを追ってきた数十体の使い魔達が距離を詰めてもう少しでという所まで来ていた。

そして先頭に居た使い魔がさやかを攻撃の射程に捉え、体から突き出たパイプをさらに伸ばしてさやかの頭へ振り落とそうとする。

(マミさん、まどか…助けて！)

「……………あれ？」

やられる、そう思ったが来ると思っていた攻撃が来ない。

何が起きたのかとさやかが目を開くと、使い魔達が上空を見て慌てているように見えた。

「何、何が起きてるの……上？」

さやかが上空を見ると、さやかと使い魔達との丁度間にあつたビルが倒れてきていた。そしてビルはさやかと使い魔達の間を塞ぐように倒れ込み、道を阻まれた使い魔達は混乱していた。

「何が起きてるか全然わかんないけど、取りあえず逃げるなら今しかないよね……」

何故ビルが都合よく倒れてきたのかはわからないが、こんな奇跡はもうないだろうと感じたさやかは立ち上がり、少しでも使い魔達から逃げるために再び走り出す。

そして、その様子を倒れたビルの陰から伺う人物がいた。

「……………美樹さやか、何故魔女の結界に一人で……」

ビルを倒壊させた張本人である「仮面」は、さやかが使い魔達からひとまず逃げたのを確認すると、この結界を作り出した魔女をさがすべく動き始める。

第九話

「邪魔だ」

《&・▽@嗚呼嗚呼アア!!》

黒い大剣で切り裂かれ、使い魔は不気味な金切り声をあげて倒れこむ。

ゴチャリと金属と肉が混ざったような不快な音を立てながら暫くその場でビクビクしていたが、やがて力尽きその場で動かなくなつた。

「魔女の気配を追って来たのはいいが、美樹さやかが結界に囚われているとはな」

魔女の気配を追って見滝原の病院付近で魔女の結界を見つけ侵入したは良かったが、美樹さやかが囚われているとは思っていなかった。

使い魔に襲われていたのを偶然見かけた為とつさに助けに入ってしまったが、戦う手段を持たないさやかでは、誰かの護衛もなしにこの結界から生きて脱出するのは不可能だろう。

「さつさと魔女を倒して終わらせるつもりだったが、美樹さやかが結界内にいるとなると放っておくわけにもいなくなるな。逃げるだけの時間は稼いだが、人間の彼女がいつまでも無事とはいかないだろう。しかし今回の魔女は……」

【仮面】は意識を結界内で巡らし魔女の気配を探るが、魔女の位置がうまく特定できないのかため息をついて辺りを見回す。

「結界内のそこら中に魔女らしい反応が出ている……というか、こちらから逃げるように結界内を常に高速で移動していると表現した方が良いか。向こうに反応が出たと思つたらすぐに別の場所に反応が移る。さて、どうしたものか」

さやかに合わせて行動するとなつても結界内を常に高速で移動させては魔女を見つけるのは難しく、だからと言ってさやかを無視して魔女の追跡だけに力を注げば追いつくことは出来るかもしれないが、

そうなってしまうばさやかを無事に結界から脱出させられる保証はない。

一応キュウベえとは「まどかを守る」とだけ約束をしたが、さやかが死んだとなれば親友であるまどかは精神的なダメージを負うことになるのは間違いないだろうし、今後【仮面】自身の目的を果たすためにもここでさやかに死なれては厄介な事になりかねない。

「仕方ない、手間ではあるが美樹さやかを護衛しつつ魔女を探すしかないか……む？」

【仮面】は逃げたさやかの後を追おうとしたが、ふと前方へ目を向けると、暗がりの方から【仮面】の方へと何者かが歩いて来ていた。

【仮面】は大剣を構えて警戒し、やがて街灯がその人物を照らし出し正体が露になる。

「まさか、あなたがここに居るとは思わなかったわ」

【仮面】の前に現れたのは、魔法少女の法衣に身を包んだ暁美ほむらだった。

ほむらは【仮面】の姿をはつきりと捉えると拳銃を盾から取り出し【仮面】へと構える。

「……暁美ほむら」

【仮面】もほむらの姿を視界に捉えると、構えていた大剣をゆつくりと下し、仮面の内から彼女を睨む。

お互いに睨み合いが続く中、やがてほむらが口を開いた。

「あちこちの魔女結界に入っては魔女を倒しているみたいだけど、一体何がしたいの？ 貴方は私達魔法少女とは存在が違うみたいだし、グリーフシールドが目当てでもない。貴方が魔女を倒しても何も得ることがないと思うのだけど、まさか街の人達を守るために魔女を倒して回ってる訳でもないでしょ？」

ほむらからの問いに少し間を置いた後、【仮面】は言葉を返す。

「……私は私自身の為に魔女を倒して回っているだけで、それ以上の理由などない。銃を構えてもらってるところ申し訳ないが、生憎今は貴様に構っている暇などないのでな」

【仮面】はそれだけを告げるとほむらに構わず歩き出すが、ほむらは

無視する【仮面】に更に接近し、通り過ぎようとする彼の背中へ拳銃の銃口をくつつけ、カチャリと音を立てセーフティを外す。

「これなら絶対に外さないわ」

銃口を背中に押し当てられる感触を得た【仮面】は立ち止まり、じつとしたままほむらへ声をかける。

「……いったい何のつもりだ」

「その説明で私が納得するでも思ったの？あなたは明らかに魔法少女でも人間でも無い。加えてキュウベえに手を貸しているとなら尚更野放しにはおけないわ」

ほむらは拳銃を当てる力をさらに強め、【仮面】へ説明をするように促すが、【仮面】は至って落ち着いたまま言葉を紡ぐ。

「あれ以上の説明など実際必要無いだろう？私が何をどう説明しようとも、貴様にとつて私が敵であると言う事実は何も変わらん。それとも、私が一々行動を起こすたびに貴様が納得する理由を用意しなくてはいけない何かがあるのか？」

「あなたが魔法少女の戦いに横槍を入れるのなら、私も魔法少女である以上は口を出す権利がある。あなたがどういうつもりでキュウベえに手を貸しているかは知らないけれど、その行動はこの見滝原の人々だけじゃなく、いずれはこの世界を滅ぼす引き金になりかねない。……特に鹿目まどかとの接触の際の妨害、やめてくれないかしら。迷惑なのよ」

魔法少女と魔女の秘密を知るほむらからすれば、【仮面】のキュウベえへの手助けは只々キュウベえの犠牲者を増やしていくばかりで、悪い方向へ転がるだけだ。

特にまどかがキュウベえと契約して魔女になってしまえば、この見滝原のみならずいずれは世界を滅ぼしてしまう。

なによりも自身のたった一人の親友であるまどかを救う為にこのループを繰り返しているほむらからすれば、キュウベえを護衛する【仮面】の存在は最大の脅威であり、無視することはできない。

「これは意外だな。私はてっきり、貴様は自身の目的のためならば周囲の者を切り捨てるばかりかと思っていたが他者を気遣うとは、冷た

く見えて随分とお優しいことだ」

「……私は質問をしているの。私を笑うのは別に構わないけど、聞かれたことにはちゃんと答えてくれないかしら。それが出来ないのなら、今ここであなたの身体をハチの巣にしてあげても良いのだけだ」

嘲笑うかのような【仮面】の言葉に対しほむらは憤りを感じたものの、平静を装い至って落ち着いたまま【仮面】へ言葉を返すが、【仮面】はやれやれといった様子で肩を軽く竦めほむらの質問へと再び答える。

「さつきも言っただろう。私は自身の為にキュウベえに手を貸しているだけだ。故に私の行動が後にこの見滝原に被害をもたらす結果になろうとも、私は私の目的を果たせられればそれで良い。それ以外の事などどうでも良いんだ」

「あなたは……ッ!？」

【仮面】の余りにも身勝手な考え方に抗議しようとするほむらだが、突如【仮面】に手を出され制止させられる。そして【仮面】はほむらの後方を指さし、確認するよう促した。

「……なに？」

【仮面】を警戒しながらもほむらは自身の後ろへと目をやると、遠くからこちらへと走ってくる人影が確認でき、徐々にその人影の正体がハッキリとする。

「もおおおー！なんなのよおおおおー！」

その人影の正体は美樹さやかだった。それを視認したほむらは驚いた様子で目を丸くする。

「美樹さやか……。どうして一人で魔女の結界に」

さやかは息も絶え絶えで、今にも倒れ込みそうなほど苦しそうな表情でこちらに全力で走ってきていた。おまけに大量の使い魔を引き連れて。

さやかの後ろに続く使い魔達を確認したほむらは銃を構えて交戦に備えているが、【仮面】は握っていた大剣を消し、その場から歩き去ろうとしていた。

「ちよつと、話はまだ終わっていないのだけれど何処へ行くつもり？」
歩き去ろうとする【仮面】を呼び止めるほむらだが、【仮面】は顔だけ少しほむらの方へ向けると言葉を投稿かける。

「少数が多いとは言え、あの程度の使い魔ならば貴様だけでも十分事足りるだろう？」

「……魔女はどうするのよ」

「魔女はもうこの結界にいない。貴様と長話している間に逃げたようだ。元は美樹さやかを守りながら魔女を倒す予定だったが魔女もいなくなり、美樹さやかに関しても貴様が来てくれたお陰で私が面倒を見る必要も無くなった。となるとこの結界に私が残る意味は無いだろう」

【仮面】はそれだけ言うと、再び歩き出し闇に包まれ消えていった。「勝手すぎるにも程があるわよ……」

ほむらはため息をついて再度美樹さやかが引き連れてきた使い魔との交戦に備え、一方で美樹さやかはようやくほむらの居る場所までたどり着き、膝について息を切らしていた。

「あ……あんた転校生？なんでここにいるのよ」

「それはこっちのセリフなのだけど、今は悠長に話をしてる場合じゃないわ。死にたくなければそこでじっとしていなさい、美樹さやか」
ほむらはさやかの前に立ち、さやかが引き連れてきた使い魔達と対峙すると、魔法少女であるほむらの姿を見た使い魔達はただの人間だったさやかの時とは打って変わって、ほむらと少し距離を置いた状態で様子を見ている。

「人間なら誰彼構わず問答無用で襲う割には、相手が魔法少女になつた途端狼狽えるなんて随分都合が良いのね。……まあ、そっちから来ないのならこちらから一方的にやらせて貰うわ」

ほむらは自身の左腕に装備している盾に手をかざし、時間停止の魔法を発動する。魔法の効果を受けた使い魔達とその周囲の時間は停止し、ほむら以外のその場の全員がピクリとも動かなくなった。

周囲に自身の魔法の効果浸透したのを確認したほむらは、盾から機関銃を取り出し、使い魔全ての頭に向けて銃弾を放つと再び左腕の

盾へ手をかざして時間停止の魔法を解除する。

「リリース」

魔法を解除すると同時に止まっていた時間が動き出し、放っていた銃弾は全て使い魔の頭に命中する。

《啞阿アアアアア!?!》

《愚魏ギイイイギギギ!?!》

鉛玉をの雨を浴びる使い魔達は痛みに打ち震えながら不気味な奇声を上げ、次から次へとどす黒い血を噴き出しながら倒れていく。

「なに……?どうなってんのよ……」

先程まであれだけいた使い魔が一瞬で死んでいくの目の当たりにしたさやかは目の前の光景が信じられず混乱し、瞬く間に周囲にいた使い魔達は全て死に絶え、辺りは使い魔の血で満たされていた。

そして使い魔が全滅すると結界は徐々に形を崩していき、見慣れた街の通りへと戻っていく。

結界が崩れ景色が元通りになると、ほむらは魔法少女の法衣を解除して尻もちをついてるさやかの方へと向き直る。

一方でさやかは未だに先程起こったことに対する理解が追い付かず、呆然としていた。

「命拾いをしたわね。美樹さやか」

「……え?あ、あんた一体何をしたのよ……?」

ほむらに声をかけられたさやかはハッと我に返りほむらに質問する。

「あなたがそれを知る必要なんてないでしょ。一人でこんな人気の無い通りにいるなんて魔女に餌にしてくれと言っているような物だわ。魔女の存在を知っている者なら、普通はこんな人気の無い道は選ばないと思うけど……あなた、それともわざと魔女の結界に?」

「そんな訳ないでしょ!病院の帰りで遅くなつたから、近道を使つたらいつの間にか結界の中にいたの!」

「病院?」

「あ……て、転校生には関係ないでしょ!あたし、もう行くから!」

さやかはとっさに出してしまった病院というワードにハツと言

葉を濁し、慌てて立ち上がった。その場から急ぎ足で去っていった。

「そう言えばそろそろね……」

ほむらはさやかのかの去っていく後ろ姿を見送りながら、病院という言葉でとある魔女のことを思い出していた。

「これまでバママミの命を幾度もなく奪ってきた魔女……。そろそろ孵化が始まる頃合いね。恐らく今回もバママミが結界の中に行くだろうし、それに加えて今回は【仮面】までいる。あの魔女との戦いに彼が介入するかは分からないけれど、念のため今まで以上に慎重に行かないと……」

「やれやれ、さつきはとんだハズレを引き当てた物だな」

「先程の結界のことかい？」

「……」

先程の結界からほむら達より一足先に出てきていた【仮面】は、美樹さやかが上条恭介の見舞いで足繁く通う病院付近の鉄塔の上から、病院の壁に突き刺さるあるモノを見つめていた。

何気なく呟いた独り言のつもりだったが、いつの間にか当たり前のように隣にいたキュウベえに聞かれていたらしく、反応されたことによりキュウベえに気づいた【仮面】は、少し呆れたように息をつく。

「……貴様、暫くは用事で見滝原を離れてるんじゃないやなかったのか？」

横でちよこんと座っているキュウベえに【仮面】が声をかけると、キュウベえは尻尾を左右に振りながら【仮面】の前に出て病院の様子を覗き込むように顔を出す。

「用事が意外と早くすんだものでね。予定より少し早くこちらに帰ってこれたよ」

「ほう」

「それに、僕もアレが気になってね。キミも前々から気づいてはいたんだらう?」

「……」

キュウベえはそう言うところにある一点を見つめだす。それは先程から【仮面】も様子をみていた、病院の壁に突き刺さっているグリーンフィードだった。

壁に突き刺さったグリーンフィードは魔女を討伐した際に入手できる物とは違い、黒い靄のようなものが噴き出ている。

「そろそろといったところかな、あれは。多分明日にでも結界を作り上げると思うよ」

「結界が完成する前にアレを破壊することはできないのか?」

「破壊ができない訳じゃないけど、変に刺激を与えると場合によっては魔女の孵化を速めてしまうからね。ああやって結界が完成しかかっているグリーンフィードは下手に手を出さないほうが良いよ。それに……」

「?」

キュウベえは考え込むように少し間を空けると、再び話を再開する。

「これはあくまで勘ではあるんだけど。あのグリーンフィードの中から今までとは違う嫌な感じがするんだよね」

「魔女じゃないのか?」

「反応的には魔女で間違いないよ。ただ、恐らく今までの魔女と比べるとかなり強力な個体だね。以前からマミに討伐をお願いしようと思っただけだけど、こうやって孵化しかかっているのを実際にみて見るとマミだけじゃ少し不安かな」

「……」

キュウベえの話の流れ的に何かを悟ったのか、【仮面】は自身の頭によぎる嫌な予感を察知し、その場から去ろうとするがキュウベえに呼び止められる。

「そこでキミにお願いがあるんだけど」

「……おい」

「キミには明日、あの結界が出来上がったらママと共に魔女の討伐に向かってほしいんだ」

「おい、貴様」

「何かな？」

【仮面】を無視して勝手に話を進めようとするキュウベえに、【仮面】は黒い大剣をキュウベえの首元に突きつけ、得物を突き付けられたキュウベえは、動揺することなく首を小さく傾げて【仮面】の顔を見つめる。

「一体どれだけ私の仕事を増やすつもりだ。現時点でも貴様に加えて鹿目まどかのお守りがあるのに、これ以上面倒ごとを増やしてくれるな。バママはこの街で経験を積んできたベテランなのだろう？ 多少敵が強いくらいで大した問題にならないのではないか？」

「戦いにおいての強さというのは何も本人の技量だけが問われる訳じゃないからね。敵との相性も時には大きく関係してくることだってある。それこそキミだって元居た世界、オラクルという所で散々戦ってきたんだから理解できるんじゃないかな？」

「……戦力が欲しいのなら他の街から魔法少女を引っ張ってくることはできないのか？」

「声はかけたんだけどね。どうにもママとは顔を会わせたくないみたいで、話を聞いてくれなかったんだ。キミには申し訳ないけど、頼まれてくれるかな？」

「……」

【仮面】は少し考えこんでいたが、元の世界に帰る件もある上、ママが魔女討伐に行くとなれば恐らくは鹿目まどかと美樹さやかもついていくに違いない。

それに、万が一鹿目まどかにとつての憧れであるバママが目の前で悲惨な死に方をするようなことがあれば、精神的なショックから魔法少女になりたいという思いが薄れてしまう可能性もある。

こいつの思い通りに動いてやるのは癪ではあるが、今ここでバママに死なれるのも確かに望ましくはない。

「……わかった。明日の魔女討伐には協力しよう」

「ありがとう。時間については明日また追って伝えるよ！」

「ふん」

キュウベえへ了承の返事をした【仮面】はキュウベえのわざとらしい満足したような仕草に憤りを覚えながらも、鉄塔をあとにした。

第十話

「さやかちゃん、仁美ちゃん、おはよう」

「おつす。まどか!」

「おはようございます。まどかさん」

翌日、いつも通りに学校に登校したまどか。さやかと仁美が話しているのを見つけたまどかは、二人に声を掛け挨拶をする。

声を掛けられまどかに気づいたさやかと仁美の二人も彼女と挨拶を交わし、笑顔で手を振る。

「二人で何話してたの?」

「それがさー。仁美がまたラブレター貰ったんだって。全く、仁美はモテるね〜」

「もう。さやかさんったら、からかわないでください!」

「いいなあ、仁美ちゃん。私も一通くらい貰ってみたいなあ……ラブレター」

どうやら仁美がラブレターを貰ったらしく、その話題で二人は盛り上がったようだ。

因みに仁美がラブレターを貰うのは今回が初という訳ではなく、しよつちゆう貰ってはいるようなのだが、本人は一週間に何通も届くラブレターにどう断りをいれようか毎回困り果てているらしい。

まどかはそんな仁美の話を聞いて少し羨ましかったのか、一通くらい自分も貰ってみたいと口に出し、そんなまどかの羨む発言を聞いたさやかは、まどかの頭をわしゃわしゃと撫でながら。

「なんだあまどか。あんたも彼氏欲しいのかあ? なんならあたしがまどかの彼氏になってあげよっか?」

「もおくさやかちゃんったら。やめてよ!」

さやかにかからかわれたまどかは、さやかのわしゃわしゃする手を振りほだきながら可愛らしく頬を膨らませる。そんな様子を隣で見ていた仁美は微笑ましそうに二人を見ていた。

いつものように弾む和やかな会話。そんな三人を後ろから見てい

た存在が、まどかとさやかに話しかける。

『まどか、さやか、突然ごめんよ。今ちよつといいかな?』

『つわ!? キユウベえ? ビックリした……』

『ちよつと驚かさないですよ! てかあんた、いつからいたの……』

突然テレパシーで頭の中に語りかけてきたキユウベえに身体を一瞬ビクツとさせた二人は、後ろの少し離れた所で座っているキユウベえの姿を確認する。

『二人に急ぎで話さなきゃいけないことがあるんだ。登校中悪いんだけど、こつちに来てくれるかい?』

『急ぎで話さなきゃいけないことって……』

『一体何の話よ?』

キユウベえはまどかとさやかにそう伝えると道から外れた茂みの奥へと歩いていく。

『……? まどかさん、さやかさん。二人ともどうしたんですの?』

まどかとさやかが黙ってジツと後ろを見つめてるのを不思議に思ったのか、仁美は二人に声をかけ心配そうに顔を覗き込む。

「仁美ちゃんごめん! 私、ちよつと忘れ物しちゃったから先に行つて!」

「あたしも! 仁美ごめん!」

「え? あ……あの、お二人とも?」

まどかとさやかは仁美にそれだけ言うと、走ってキユウベえの後を追って行き、一方で二人に置いて行かれた仁美はポカーンとしながら二人の背中をただ見送っていた。

「あら鹿目さん、美樹さん? 二人ともどうしたの?」

「あれ、マミさん……?」

「ほんとだ、マミさん何してるんですか?」

キユウベえの後を追ったまどかとさやかだったが、そこにいたのは

キユウベえではなくマミだった。マミもまどかやさやかの姿を確認すると目を丸くして少し驚いたように反応する。

「私達、キユウベえに話があるって言われてここに来たんですけど」

「鹿目さんたちも？」

「つてことは、マミさんもキユウベえに呼ばれて？」

「ええ、急ぎの用があるから少し話をさせてほしいって言われて私もここにきたんだけど……キユウベえがいないみたいなの」

どうやらマミもキユウベえに話があると呼ばれていたようなのだが、呼び出した当の本人がどこにも見当たらないようで、まどかやさやかも辺りをキョロキョロと見回してみるがキユウベえの姿が見当たらない。

「キユウベえつたら、人の事呼んでおいてほつたらかすなんて……」

マミは困ったように腕を組んでため息をつく。

「待たせたね。三人とも」

暫くすると茂みの奥からキユウベえが顔を覗かせる。キユウベえが出てくると、さやかは不機嫌な様子でキユウベえへと歩みよる。

「あんたねえ、人の事呼んでおいて放っておくとかどういう事よ！あたし達、学校があるんだけどー」

「ごめんよ。最後の一人を説得するのにちよつと時間がかかってね」

「最後の一人つて……？」

キユウベえ曰く最後に呼んだ一人がここに来るのを拒んでいたように、説得に時間がかかったらしい。

呼ばれたのはマミ、まどか、さやかの三人だと思っていたまどかはキユウベえが呼んだ最後の一人を探すが、どこにも見当たらない。

「いるんだろう？出てきてくれるかな？」

キユウベえがそういうと辺りの空気は一気に張り詰められ、明らかに空気が変わるのを感じ取ったマミ達は全身に寒気が走るのを覚えた。

するとキユウベえの隣に黒い粒子のような物が徐々に集まっていき、その集まった粒子が球体状になると、中から一人の人物が出てきた。

「……」

【仮面】だ。以前直接対峙したマミは、その人物が【仮面】であるとは分かった途端に自身の手にマスクett銃を出現させ、【仮面】に向けて構える。

さやかもまどかも【仮面】の姿を認識すると、すぐにマミの傍へ駆け寄り驚いた声を上げる。

「あ、あんた……。あの時の仮面野郎！」

「どうして、この人がここに……？」

忘れるはずもない。前に廃ビルに出現した魔女結界の魔女を討伐する時に鉢合わせした際、近くにいるだけで押し潰されるかと思うほどの重いプレッシャーを浴びせられたのだ。

その時の感覚を鮮明に覚えていた三人は、キュウベエの隣で佇んでいる【仮面】に対して警戒をする。

「キュウベエ！一体どういう事……。どうして彼がここにいるの？」

マミは一滴の汗を顔に浮かべながらキュウベエに問う。

「そんなに警戒しなくても良いよ。彼は今回キミ達にお願いする内容の事で、助っ人として僕が呼んだんだ。敵じゃないから安心してほしい」

「……助っ人って？」

さやかは【仮面】の事を睨みながら、キュウベエに【仮面】が今回助っ人としてきた意味を聞く。

「三人が疑問を抱くのは無理もないね。実は今回キミたちを集めたのは孵化しかかっているグリーンフシードについての事で話があったんだ」「孵化しかかっているグリーンフシード……」

「っていったいどういう事よ？」

グリーンフシードが魔女の卵であることは以前マミから話を聞いた際に理解はしていたが、孵化しかかっている物についてはあまり深く話されたことは無かったため、まどかとさやかはピーンと来ないといった表情でキュウベエの話を聞くが、二人がいまいち状況が掴めず困っていたことを見かねたマミは、まどかとさやかにグリーンフシードの孵化について話し始めた。

「孵化しかかったグリーンフシードっていうのは、言葉の通り魔女に孵ろうとするグリーンフシードの事よ。以前二人にもグリーンフシードは魔女の卵ってことは説明したでしょ？倒した魔女から入手できる物についてはまだ孵化できるだけの穢れが足りないから安全に使うことができるけど、それも無制限に使うことは出来ない」

「だからある程度使用して穢れが貯まったグリーンフシードだったり、孵化の為の穢れが足りていないグリーンフシードに関しては安全の為に僕が回収することになってるんだけど……稀に回収できずにそのまま孵化してしまうケースがあるんだよね。今回はその内の一つが孵化しかかっていて、その処理をキミたちにお願しようと思って話をしたんだ」

「なるほど……」

「そんなことが……」

まだかときやかはマミとキュウベえから詳しい話を聞いて納得したように頷き、二人が現状を理解できたのを確認するとマミはキュウベえに「仮面」を今回助っ人として呼んだ理由について問う。

「話は分かったけど、どうしてそれが仮面の彼が助っ人として呼ばれることになるの？ただ魔女を討伐するだけなら、私だけでも十分だわ」

「いつもならそうなんだけどね。今回の魔女に関しては今までマミが戦ってきた魔女達と比べても、比にならないくらい強い個体なんだ。だから今回はマミ一人では危険だと僕が判断した。突然こんなことを言われても納得は出来ないかもしれないけど、この魔女討伐では彼をマミのサポート役として同行させて貰う」

「今までと比にならない……。そんなにその魔女は強力なの？私でも厳しいくらいに……？」

「ああ、そうだね」

「そう……」

マミは自身でも敵わない相手がいるという話に最初は半信半疑だったが、キュウベえがいつも以上に念を押してくることで、それが確信に変わり、納得はしたようだった。

だがマミはキュウベエの隣にいる【仮面】を睨みつけながら言い放つ。

「でも、私は彼を信用できない。以前の事もあるけど、いきなり協力しろって言われてわかりました……なんて素直になれる程私は彼を知らないわ。いくらキュウベエの頼みでも、彼と協力して魔女を討伐することに領けない。魔女を討伐するなら、私一人で行くわ」

「マミ、キミは……」

やはり今回の協力に關してだけはマミも譲る気はないらしく、魔女の討伐は単独で行うつもりでいるようだ。

できるだけマミに納得してもらえよう説明したつもりだったキュウベエは、マミが承諾してくれないことに困り果てている様子だったが、今まですつと静観していた【仮面】がここにきてようやく口を開いた。

「意地を張るのは貴様の勝手だが、ここで意固地になって危険な橋を渡るより、今回は素直に他者の力を借りて背中を任せの方が良い。キュウベエの説明にもあつた通り、今回相手にする魔女は確かに強い。死にたいのなら無理に止めるつもりは無いが、自身の命が少しでも惜しいと思えるのなら協力するほかないと思うが？」

「……あなた、私が単独で挑めば死ぬとでも言いたいの？」

無謀だと言わんばかりの【仮面】の言い回しに腹が立ったのか、マミは声に怒りを孕ませる。

「言いたいも何も正にその通りだ。貴様、自分が無敵の英雄だとしても思っているのか？」

「私はそんなこと……!」

「貴様はこの街で幾多の経験を積み、それ相応の強さは確かに持っている。だが、そうやって自身の強さを過信して驕る人間程いざという時に判断が鈍り、結果として自身の身を滅ぼすことになる。何故そこまでして一人で戦うことに拘るのかは知らないが、後ろにいる二人の為にも、今回の討伐は協力するべきだ」

「……」

悔しいが【仮面】の言う事に筋は通っている事を理解できるマミは、

何も言い返せなくなり言葉に詰まる。沈黙しているマミに言い聞かせるように【仮面】はさらに追い打ちをする。

「今回の魔女に単独で挑めば貴様は死ぬ。誰にも認知される事なく、誰に悲しまれる事もなく、結界に一人取り残されて貴様は死ぬ。だが、共に戦うと言うなら私は貴様を守る為に最善を尽くす。グリーンシールドも必要ない、貴様にくれてやる。それを踏まえた上でもう一度だけ聞くんが、本当に共に戦うつもりはないのか？」

「私……は……」

「マミさん……」

【仮面】からの最後の忠告の言葉に、マミは俯きながら考え込む。マスケット銃を握る手は小刻みに震えており、そんな様子が心配になったまどかはマミの顔を覗き込む。

考え込んでいたマミだったが決心したのか、顔を上げて彼女が出した答えを口に出す。

「私は一人で戦う……戦えるわ。だからあなたの手は借りない」

「……そうか、良くわかった。私は一切手を貸さない、好きにしろ」

マミから伝えられた答えに、【仮面】は呆れたように首を横に振ったため息をついた。

「だそうだ、キュウベえ。グリーンシールドがある場所をそろそろ教えてやったらどうだ？」

「……わかった。孵化しかかっているグリーンシールドがある場所はさやか。キミが上条恭介のお見舞いで通っているあの病院だ」

「……え？」

グリーンシールドがある場所を聞くなり、さやかの顔が青ざめていく。それもそのはず、その病院というのが美樹さやかの幼馴染、上条恭介が入院している病院だからだ。

「結界が完成してしまえば、使い魔や魔女達は病院を対象に人間の生気を奪っていく。只でさえ弱っている人間から生気を奪うことになったら目も当てられなくなってしまうだろうね」

「そんな……」

「美樹さん……」

只でさえ弱っている人間が魔女の影響により更に衰弱していくという説名を受けるさやかはシヨックから呆然とその場に立ち尽くすが、その様子を見たマミはさやかの両手を取るときゅっと強く握りしめた。

「大丈夫よ、美樹さん。私が必ず魔女をやっつけるから、私に任せて」

「マミさん……！」

マミからの言葉に安心したのか、さやかは笑顔を見せる。

「あう……」

一方でまどかは先程の【仮面】の話が引つ掛かっているのか、なんともスツキリしないといった表情でいた。

「結界が出来上がるのは恐らく今日の夕方辺りだ。学校が終わったらすぐに病院へ集合してほしい。また詳しい説明は追ってするよ」

キュウベえからの話が終わるとマミ、まどか、さやかの三人は授業があるため学校の方へと歩いていった。

まどかは去り際に【仮面】へ何か伝えたい事があるかのような様子を見せていたが、学校の授業が始まることもあり、結局何も言えずに行ってしまった。

三人が学校へと去っていくと、キュウベえが口を開く。

「どうするつもりだい？」

「何がだ」

「マミの事だよ。口ではああいつていたけど、明らかにキミの言葉に動揺していた。このまま単独で挑むことになれば、本当に彼女の身に危険に晒されるかもしれないよ？」

「……」

キュウベえはマミの事をどうするつもりなのか【仮面】に尋ねるが、【仮面】はキュウベえの言葉には何も返さず、ただただ黙っているだけだった。

「まあ、彼女があそこまで言うなら僕も流石に無理強いは出来ない。本人がどうしても一人で戦いたいと言うのなら、彼女の意思を尊重するしかないし、今回は彼女の腕を信じるしかないね」

キュウベえはそういうと、茂みの奥へと姿を消していった。

「……ふん」

キユウベえがいなくなると、その後が続いて【仮面】も闇に包まれて姿を消した。

—— 放課後 見滝原市内の病院前

「……ね」

放課後、学校が終わった後、見滝原市内の病院に、マミ、まどか、さやかが集まっていた。

キユウベえに指定された場所に行くと、確かに孵化しかかっているグリーンフシードが病院の壁に突き刺さっており、それを確認したマミはグリーンフシードに手をかざし、自身の魔力を込める。

すると魔女の結界への入り口が開き、内部には結界の空間が広がっているのが伺えた。

「結界自体はもう出来てるみたいね」

「魔女の結界……」

「本当にこの病院にあるなんて……恭介」

結界そのものは既に出来上がっているらしく、後は魔女が生まれるのを待っているような状態だった。結界内部の様子を伺ったマミは魔法少女の法衣に変身し、結界内部への侵入に備える。

結界の内部を見たまどかとさやかはその禍々しい様子に不安そうな顔をするが、マミはそんな二人の頭を撫でて安心させようとする。

「マミさん……」

「大丈夫よ、二人とも。私だってこれまで沢山の魔女を倒してきたし、相手がちよつと強いくらいじゃ負けたりなんかしないわ」

「はい！あたし、マミさんの事信じてますから！」

マミの言葉にさやかは安心し、マミもそれに微笑んで応える。まどかはマミの微笑んだ顔を見たものの、やはりどこか不安そうな影が見え隠れするマミを心配するように見つめる。

「集まったみたいだね」

準備が整うのと同時に、キュウベえも三人の前に現れ、今回の魔女討伐について簡潔に説明を始める。

「見た通り結界自体は既に出来上がっている。魔女が孵化するまでは恐らくまだ一時間程度はかかると思うけど、孵化が早まることも想定して結界に入ったら出来るだけ急いで最深部へと向かってほしい。ただ、急ぐと言っても魔女が孵化直前ということもあって使い魔達の警戒も強くなっていると思うから。道中の戦いは極力さけて、静かに行動して」

一通り説明が終わると、キュウベえは結界の入り口前に立つ。

「それじゃあ、いこうか」

そう言うとキュウベえは結界内部へと入り先へと進みだした。

その後にマミ、まどか、さやかの三人も続く。

(私なら大丈夫……。絶対に負けない……)

マミは自身の胸の内で緊張する自分に言い聞かせ、魔女の結界へと足を踏み入れた。

第十一話

「やっぱり、バママはこの結界に入ったのね……」

見滝原市の病院に孵化しかけたグリーンフシードが作り上げた魔法の結界に侵入したマミ達。そして少し遅れて結界の入り口へたどり着いたほむらは結界にマミ達が侵入した痕跡を確認し、やはりかと言った様子で顔を曇らせる。

今までのループと同じならばバママが今回もこの魔法結界に足を踏み入れるのは分かっていたが、実際にまた同じ運命を辿ろうとしているのを目の当たりにしてしまうと落胆する。

「今回に限っては【仮面】がいることで何かしら事に変化が起きると期待してなかった訳じゃないけど、彼がいてもバママが一人で魔女と戦う事になってしまうのは変わらないのね……」

【仮面】と言う規格外のイレギュラーが出てくることでバママの運命に何か変化が起きるかもと淡く期待していたが、今までと何も変わらない事の運びを見ると、その希望はあっさりと碎かれる。

（いえ……そもそもバママはまどか達の先輩という自身の立場に強い責任感を持っているから、まどかや美樹さやかが後ろにいる以上、彼女にいくら協力を持ち掛けた所で意地でも一人で戦おうとする。仮に【仮面】がバママに共闘を持ち掛けていたとしても、きっと何も変わらない。彼女は絶対断るはず……）

バママは確かに強者だが、今まで一人で戦ってきた上に鹿目まどかと美樹さやかという二人の「守る対象」が出来たことでより強い責任感が生まれてしまった。

結果として今、マミは自身の魔法少女としてのプライドと二人を守る立場の板挟みに合い、マミ本人も心の制御ができなくなってしまう。

今までのループで何度も彼女が死ぬ所を見て、マミがそうした理由で命を落としてきたのをほむらは知っていた。だからこそ【仮面】と言う脅威と接触することで、何かしらマミも自身の考えを改めてくれるとかも思っていたほむらは、「今回も何も変わらなかった」事実

余計にショックを受ける。

「……変わらなかつた物は仕方がない。今はとにかく、バマミを救うことだけに集中するべきね。間に合うと良いのだけれど」

ほむらは魔法少女の法衣に身を包み、装備が万全なのを確認すると結界へと足を踏み入れていく。結界の内部に入ると、使い魔達が魔女の誕生へ向けての準備をしているのか、辺りは騒がしかった。

物陰から様子を伺い、こちらが結界に侵入した事に気づかれていないのを確認すると、ほむらは使い魔達の目を上手くかいくぐりながら移動を行う。

「この感じだと魔女の孵化までそう長くはない、急がないと。バマミ、お願いだから無事でいて……」

——魔女の結界 第三層部

「鹿目さん！伏せて！」

「え……う？つきや!？」

《・&@・≡イ⊗!?!?》

あれから結界の奥へと進んでいたマミ達一行は、結界の中枢部へと辿り着いていた。辺りには巨大なカプセルや薬などが入った瓶、輸血パックのような物がぶら下がっており、先程のお菓子だけで構成された第一層、第二層の時とは打って変わって、病院を模したかのような空間が広がっている。

流石に中枢部まで来ると敵の数も初層と比べても比にならない程多く、使い魔達に発見されてしまったマミ達は使い魔と戦闘になっていた。

数は多かつた物の、何とか最後の一体まで倒しきつたマミは手に握っていたマスケット銃を消しまどかへと駆け寄る。

「鹿目さん、ケガはしてない？」

「はい、大丈夫です」

「そう……良かった」

まどかが無事なのを確認したマミはホッと胸を撫で下ろし、安心してように一息つく。

まどかと同じく物陰に隠れていたキュウベえとさやかにもケガはなく、キュウベえはマミの戦いぶりに関心しながらマミへと近づく。「流石だね、マミ。あれだけの数を相手に自身だけでなく、僕とまどかとさやかの三人をも無傷で守りきるなんて。並の魔法少女じゃ到底出来ないよ」

「それはどうも。ここまで来れば結界の最奥までそんなに距離もないし、ここからは少し歩きながら行きましようか。鹿目さんも美樹さんも、疲れたでしょう?」

「いいえ! 私は大丈夫です。……て言いたいんですけど。やっぱりちよつと疲れちゃいましたので、お願いします」

「あたしも、お願いします。すいません」

まどかとさやかは申し訳なさそうに苦笑いしながらマミの提案に甘えると、マミはクスリと笑って結界を歩き始め、まどかとさやかとキュウベえもその後続く。

四人は暫く何を言うでもなく黙々と結界を歩き続けたが、流石に会話が無いというのは気が引けたのか、マミはまどかとさやかへ以前話していたキュウベえとの契約についての話題を振る。

「そういうえば、二人は何か願い事は決まった?」

「願い事、ですか?」

「そう、願い事。もしキュウベえと契約するなら何か一つ願い事を叶えられるのだし、予め決めておいた方が万が一の時に迷うこともないだろうから。……まあ、余りこの契約の仕方は良くはないけどね」

「うーん、願いかあ。まどかは何か決まった?」

「私もまだ……迷ってるかな」

契約。それは魔女と戦う魔法少女という使命を背負う事になる対価として、願いを何でも一つ叶えられると言うキュウベえから与えられる一度きりの軌跡。

まどかもさやかも自身の胸に思い当たる願いが一切無いと言う訳

ではないが、魔女と戦う使命を背負ってまで叶えていい物かどうかと問われてしまうと、素直には領けない。

叶えるのならやはりいい加減な気持ちでは決めたくもない為、その気持ちの尚の事二人を迷わせていた。

「やっぱり、そう簡単には決められないわよね。いざ考えろって言われてみたら」

「マミさんは、どんな願いを叶えたんですか？」

マミが叶えた願いについて。まどかは以前からマミがどのような願いを叶えて魔法少女になったのか気にはなっていた。

だが人の願いを不躰にきくものではないと思っていたと言うのもあり、中々マミに切り出せなかったが、願いの話題がマミ本人から振られたことで、思い切って聞いてみることにした。

まどかから自身が叶えた願いについて問われたマミは、足を止めて黙り込む。

「ご、ごめんなさい。失礼でしたよね」

「……私の場合は、そうするしかなかったの。あそこで死んでしまうより、魔法少女になって誰かの為に戦う方が良いと思えたから。実際今の自分の生き方も、その選択をしたことにも後悔はしてないから、これでも結構幸せなのかもしれない」

「マミさん……」

「でも、だからこそ、鹿目さんや美樹さんのように願いを考える時間がある子にはしっかりと自分で考えた上で決めてほしいの。それは、私にはできなかつたことだから……ね」

マミは自身を皮肉するように話をするとう寂しげに小さく笑う。今までの彼女からは見た事もないくらいに力ない表情で笑うマミを見て、まどかは願いの内容を訪ねてしまったことに後悔していた。

「あの、マミさんー！」

「ん？どうしたの美樹さん」

「願いって、自分じゃなくて他人に使うことは出来るんですか？」

「え？」

もし願いの効果を及ぼす対象が自身だけでなく他人に指定するこ

とができるのなら……そんな考えをずっと頭によぎらせていたさやかは、その疑問の答えをはっきりさせるためにママへ問う。

ママは最初、どういうつもりでさやかがその質問をしてきたのかわからなかったが、以前にまどかから聞いていたさやかの幼馴染である上条恭介のことを思い出すと「ああ……そうか」といった表情でさやかの方へ向き、その疑問に答える。

「確かに、必ず契約者本人が願いたい事の対象になる必要はないけど……」
「？」

「自分以外の人の為に願いを叶えるのなら、それこそ他人の為に願いを叶えて自身がどうしたいのかハッキリさせないと。その人に願いを叶えてほしいのか、それとも願いを叶えた恩人になりたいのか。それって似ているようで全然違うし、その意味を履き違えたまま願いを叶えてしまったら、きつと美樹さんも後悔してしまうと思う」

「それは……」

他人の為に一度きりの奇跡を使って、自身がどうなりたいのか。さやかはママからの話に言葉を詰まらせる。

恭介の腕を直したいというその気持ちに決して嘘は無い。恭介にはまたバイオリンを弾いて欲しいし、その演奏を心から楽しそうにしている恭介の笑顔が何より大好きだった。

ただ、その笑顔が彼に戻ったとしてそこから何を得たいのか、恭介に自分をどう思っしてほしいのか。それだけがまだハッキリとしないさやかは、ママの話聞いて改めて思い悩む。

「今焦って決める必要はないわ。しっかりと自分の気持ちと向き合って、その上で彼と美樹さんにとって本当に正しい願いだと思えるのなら、それが「魔法少女の使命と釣り合う願い」になるんじゃないかしら」

「ママさん……。わかりました、もう少し考えてみます」

「ええ、それが良いわ」

「僕としては、出来るだけ早く契約してくれれば嬉しいんだけどね」

ママがさやかの疑問に一通り自分なりの答えを出して伝えると、そのやり取りを今まで黙って見ているだけだったキュウベえがママの

肩に乗ると尻尾を左右に揺らしながらさやかか顔を見つめる。

「こーら、急かすようなことを言わないの。せつかな男の子は嫌われちゃうわよ」

「別に急かしている訳ではないんだけどね」

契約を促すような物言いをするキュウベえのおでこに向けて、ママは軽くデコピンをする。

その様子を見ていたまどかときやかはクスッと笑い、二人はキュウベえを肩に乗せるママの後ろについて行く。

「ようやく追いついたわ」

そんな四人の背後から、ふと聞き覚えのある声がかかる。

「ほむらちゃん!」

「転校生!」

四人が後ろを向くと、そこには魔法少女の法衣に身を包んだ暁美ほむらが立っていた。

ママはほむらの姿を捉えると、鋭い視線をほむらへ向けて、まどかときやかを守るようにほむらの前に立つ。

「どうしてあなたがここにいるの? 暁美さん」

「この魔女は私が狩る。あなたは手を退きなさい」

突然現れたほむらはそれだけ告げてママ達の横を素通りしようとするが、ママはマスケツト銃でほむらの行く手を塞ぐと彼女を睨みつける。

「突然現れたと思ったたら今度は魔女を譲れだなんて。勝手に話を進めないで頂戴。この結界を先に見つけたのもそうだし、キュウベえに魔女の討伐を依頼されたのは私よ? あなたの出る幕は無いわ」

確かにこの結界へ先に足を踏み入れたのも、キュウベえに討伐を依頼されたのもママだ。

普通にこの状況を見るならば、この結界の魔女を倒す権利はママの方にあると言って良いだろう。

だがこの結界の魔女がママと致命的なまでに相性が悪い事を把握しているほむらとしては、ここで手を引くわけには行かない。

ママをこの先に行かせてしまったら、また彼女は死ぬ。

ほむら自身マミに対して苦手意識を持っている所はあるが、それでも以前は共に魔女と戦う事もあったし、魔法少女に成り立ての頃は戦い方を一から手解きしてくれた事もある。

…… 救うことが出来るなら救いたい。

「この結界の魔女はとても強力よ。あなた一人では手に負えない。どうしても引けないと言うのなら、せめて一緒に戦いましょう。グリーンフシードはあなたに譲るし、二人の安全も保証する」

「私がその話をきいてはいそうですか？ 納得するとも思った？ 申し訳ないけど、あなたと手を組むつもりはないわ」

ほむらは極力マミに納得してもらえるように話をつけようとするが、マミは聞く耳を持たず、ほむらの話を軽くあしらう。

「わからない人ね、一人では危険だと言ってるの。口で言ってもわからないなら、多少手荒な方法を取ってでも引いてもらう事になるけど」

「……そう」

「っな!？」

どう話をしようともわかってくれないマミに痺れを切らしたほむらは、強引な方法でマミを結界から撤退させようとするが、マミはほむらが動く前に先に魔法を発動させる。

マミが指を鳴らすと、ほむらの足元から鎖が描かれた赤いリボンが出現し、ほむらの身体を絡め取って拘束する。

身体を自由を奪われたほむらは、リボンの拘束から逃れようと腕なり脚なりを動かしているが、逃れようとすればする程リボンの拘束は固くなりほむらの身体を締め付けて行く。

「馬鹿……! 今こんな事してる場合じゃ……!」

「心配しなくても大人しくしていれば帰りには解放してあげるから、暫くそこでジツとしていなさい。行きましよう、鹿目さん、美樹さん」

「は、はい……!」

「わかりました」

ほむらを拘束したマミはまどかとかさやかの方へ向き直ると、二人を連れて結界の最奥へと再び歩き始める。

まどかはほむらの事を心配した様子で見えていたが、マミとさやか
先に行くのを見て遅れないようまどかもその後が続く。

ほむらは結界の奥へ行ってしまうマミ達を行かせまいと拘束を
抜けすため諦めずに抵抗を試みるが、リボンは更に拘束を強めてほ
むらの身体を締め付ける。

「お願い！待って、巴さん……！」

ほむらはマミ達を引き止めるため声を上げるが、その声はマミ達に
届く筈も無く、虚しく結界の空間内に木霊するだけだった。

「あの、マミさん……」

「どうしたの？鹿目さん」

結界の最奥への扉が見える中、扉へ向かって歩くマミ達だったが、
まどかは先程のほむらの事が気に掛かり、マミへ声をかける。

「ほむらちゃんの事、良かったんですか？」

突然現れて少々強引だったとは言え、一応こちらの身を案じて協力
を持ち掛けてきたほむらの事をあの場に置き去りにしてしまった事
にまどかは罪悪感を抱いていた。

まだ完全にほむらの事を信じているという訳ではない。それでも
あの時のほむらがマミへ伝えた言葉の中に嘘があるようには思え
なかった。

きつと本気で心配してくれていると、そんな気がしてならなかつ
た。

「暁美さんはグリーンフィードが目当てなだけで、その為ならどんな手
段や犠牲を伴ってもどうとも思わない子よ。鹿目さんや美樹さんも
一緒にいるのだし、こんな状況で彼女と手を組んだとして、万が一
人に何かあつたら私……嫌なもの」

共に戦うという点においては今朝のキュウベえからの話もあつて、
内心不安だったマミは少し嬉しかったが、今までの暁美ほむらという
魔法少女の言動を見直してみると、彼女がグリーンフィードという報酬
も無しに一緒に戦ってくれるとは思えなかった。

今回の魔女との戦いで死ぬかもしれないという恐怖と同時に、何よ
り心を許してしまった相手に裏切られるというのは、今まで一人で
戦ってきたマミには尚更耐えられない。

「でも、仮面の人もほむらちゃんと同じような事を話していましたし、
あの人だつてきつとマミさんの事本当に心配して一緒に戦おうつて
言ってくれたのかもしれないし。……どうしてマミさんは、二人の手
を取ろうとしないんですか？」

「ちよつとまどかー！」

「あ……ぐいめんなさい！」

今朝の【仮面】の話も、先程ほむらがマミに話した内容とほとんど
一緒だった。マミは【仮面】とほむらの事を冷酷な者だと評価して拒
絶しているが、裏を返せばそんな人物が口を揃えて「報酬はいらない。
それでも構わないから今回は協力させてほしい」と言うということ
は、今回の魔女がそれだけ強敵だというのがわかるだろう。

【仮面】もほむらも、戦う技量に関して言えばこれ以上ないくらいに
頼りになる戦力だ。それはマミも頭では理解できるが、あの二人の性
格を考えてしまうと素直に喜んでその手を取ることはできない。

さやかはまどかの口からほむらと【仮面】の事を気に掛ける言葉ば
かり出てしまっているのが不味いと感じたのか、まどかを止める。

マミからしてみれば、自分の腕が信用されていないと思われてるの
と同じだろう。

「鹿目さんは、そんなに私の事が頼りないの？」

「……え」

マミはまどかに聞こえるか聞こえないかくらいの声でそう呟き、表
情を曇らせる。

「ぐいめんなさい、なんでもないわ。行きましょう」

最奥への扉を開けると広いドーム状の空間に、色とりどりの巨大な
お菓子がそこら中に転がっている。天井に届くぐらいの椅子やテー
ブルなどもいくつか置かれており、その中心の席には大量の黒い霧を
纏ったグリーンフィードが佇んでいた。

「出てくるよ、構えて！」

キウウベえはマミの肩から降りて警戒を促すと、それと同時に霧を纏っていたグリーフードは破裂し中から黒い煙が噴出してやがてそれは魔女としての姿を形作る。

それはとても人間を食い物にする魔女とは思えないほど可愛らしいぬいぐるみのような姿で、容を成したその魔女は、ふよふよとゆっくり落ちながら高脚の椅子へちよこんと座る。

「鹿目さん、美樹さん下がって。一気に決めるわよ!」

マミはリボンの結界をまどかときやかにかけると、マスケット銃を出現させて魔女が座る高脚の椅子の脚の一本を打ち抜く。

《……!?》

椅子の脚を打ち抜かれてバランスを崩した魔女は、驚いたような鳴き声を上げて椅子から滑り落ちる。

そんな動揺している魔女にはお構いなく、マミは次々とマスケット銃を出現させ落下していく魔女の身体を的確に打ち抜いていく。

生まれたばかりで身体が自由に動かせない魔女は、マミの攻撃に抵抗する事もできずに地面へ落ちる。

「やったあ!」

その様子を見てマミの勝利を確信したまどかときやかは、安心したように安堵の息を漏らす。

マミは地面に伏して瀕死になっている魔女の頭にマスケット銃を一発撃ちこむと、その銃弾は魔女の身体の中でリボンへと変質し、魔女を宙づりにする。

「ティロ・ファイナーレ!」

マミは巨大な大砲を作り出すと、宙づりの魔女へとどめの一撃を放つ。……これで終わる。その場にいる誰もが、そう思っていた。

「マミさん!」

「マミー!避けるんだ!」

「……え?」

倒したと思っていた魔女は死んでなどいなかった。マミが倒したと思っていたのはただの「外側」で、マミに破壊されたのを引き金に本来の姿である「中身」が外皮を食い破り、その正体を露にする。

出てきた黒い大蛇のような魔女は、その大口を開けるとマミへ向かって急接近し、呆気にとられて油断していたマミは魔女の動きに反応できず立ち尽くしていた。

(私、死ぬの？鹿目さんと美樹さんを残して、このまま……一人で) 身体の底から、ずつと恐れていた感情が這い出てくる。

(あれだけ守るって約束して、あれだけ強くなろうって思っただのに) 怖い……。

(二人に自分の気持ちを伝えることもできないまま、独りぼっちで……?)

——怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

マミが恐れていた死と孤独への恐怖の手が、マミの命を握りつぶそうとする。

(嫌、死にたくない。誰か助けて、誰か……!)

マミは心の中で死にたくない、必死に助けをこう。魔女が大口を開けてマミの目前まで迫ろうとし、マミは恐怖で目を瞑る。

だがその瞬間、マミと魔女の間で大きな爆発が起きた。マミと魔女は互いに爆風に吹き飛ばされ、魔女はお菓子の山に顔をつっ込み、マミはその勢いでまどかやさやかがいる方へと投げ飛ばされる。

「マミさん！大丈夫ですか!？」

「……鹿目さん、美樹さん?」

まどかやさやはリボンの結界の内側から、目の前の地面へ投げ出されて咳き込んでいるマミへと近寄り声を掛ける。

マミは二人の声で目を開けて彼女たちの方へと顔を向けると、まどかやさやは目に涙を浮かべながら安堵の表情をマミへと見せていた。

「私、生きてるの……?どうして?」

死を確信していたマミは、自分が生きている状況に困惑する。確かにあの時死んだと思ったのに、何故自分は生きているのだろうか……。そう今の自分の置かれている状況に混乱するマミに、ふと声がかかる。

「なんとか、間に合ったみたいね」

それは聞き覚えのある声だった。声が響くと、マミ達の目の前に一人の少女が姿を現す。

「ほむらちゃん……?」

「転校生!? あんた、なんでここに」

そこにいたのは、先程マミが自身の魔法で拘束した筈のほむらの姿だった。

マミは信じられない光景を目の前に目を丸くする。

「暁美さん。あなた、どうして……」

「話は後よ。今は、あの魔女をどうにかしないと」

ほむらはそういうと、左腕の盾から銃を取り出し、魔女へと構える。

《魏イ へ§@愚後臥ア嗚呼アア……!》

お菓子の山に顔をつ突っ込んでいた魔女は、お菓子の山を破壊すると奇抜な鳴き声を上げて憤怒し、ほむらは怒り狂っている魔女へ一歩ずつ近づいて行くと、魔女を射程まで捉えて銃のセーフティを外す。

マミは魔女へと向かっていくほむらと共に戦おうと再びマスケツト銃を握って立ち上がろうとするが、先程の恐怖の影響か、腰を抜かして地面へとへたりこんでしまう。

「待って暁美さん! 一人で戦うなんて無茶よ! 私も一緒に……あっグ!?!」

「そんな状態で共に戦われても邪魔になるだけだわ。あなたは鹿目まどかと美樹さやかを守りなさい。あの魔女は、私が倒す」

「でも……!」

「その二人はあなたにとって大切な人達なのでしよう? なら、今は意地を張らないでちゃんと傍にいてあげなさい」

「暁美さん……わかったわ」

「っ!? マミ、取り逃がしていた使い魔だ! 入り口からくる!」

まどかの隣にいたキュウベえが突如として声を上げ、取り逃がしていた使い魔の接近をマミへと知らせる。最奥の入口へと目を向けると、かなりの量の使い魔達が押しかけてきており、まどかとさやかはその数に圧倒される。

「あんなに沢山……」

「マミさん……!」

マミは使い魔達を視認すると、抜かしていた腰を奮い立たせてマスケット銃を構える。マミ達に接近した使い魔達は次々と襲い掛かるが、マミは手を震わせながらも一体一体打ち抜いていく。

だが一匹の使い魔がマミの死角に入ると、力を込めた一撃をマミに喰らわせて吹き飛ばす。

壁に激突するかと思われたが、飛んできたマミの身体をほむらと共に居合わせた、あるもう一人の人物が受け止めた。

「あなたは!? どうして……」

「……」

マミの身体を受け止めていたのは【仮面】だった。【仮面】はマミが無事なのを確認すると、自身の腕からマミをゆつくりと下して地面に立たせる。

「まだ、戦えるな?」

【仮面】はノイズがかった声で問うと、マミが落としたマスケット銃を拾い上げて彼女へ差し出す。マミは少しの間口を開けて呆けているが、我に返ると【仮面】が差し出しているマスケット銃を手取る。

「は、はい! まだ戦えます……!」

そう口にするマミは、表情こそいつものように凛々しい物となっているが、マスケット銃を握る手は震えており、足取りもおぼつかない。

そんな彼女の様子を見た【仮面】は、自身でもらしくないなと思いつつも、マミの背中を優しく押し、言葉を掛ける。

「緊張する必要はない……と言っても無理な話だが、貴様の背中が私を支える。だから落ち着いて戦え。貴様は今この場において、一人ではない。大丈夫だ」

「……」

【仮面】はそう言うのと右手に黒い大剣を出現させて、使い魔達へと構える。【仮面】に貰った言葉のお陰か、マミの手や足の震えは少しづつ小さくなり、マミは覚悟を決めると【仮面】の横へ並び立つ。

「行くぞ」

「……はい!」

こうして魔女との闘いの火蓋は切って落とされた。